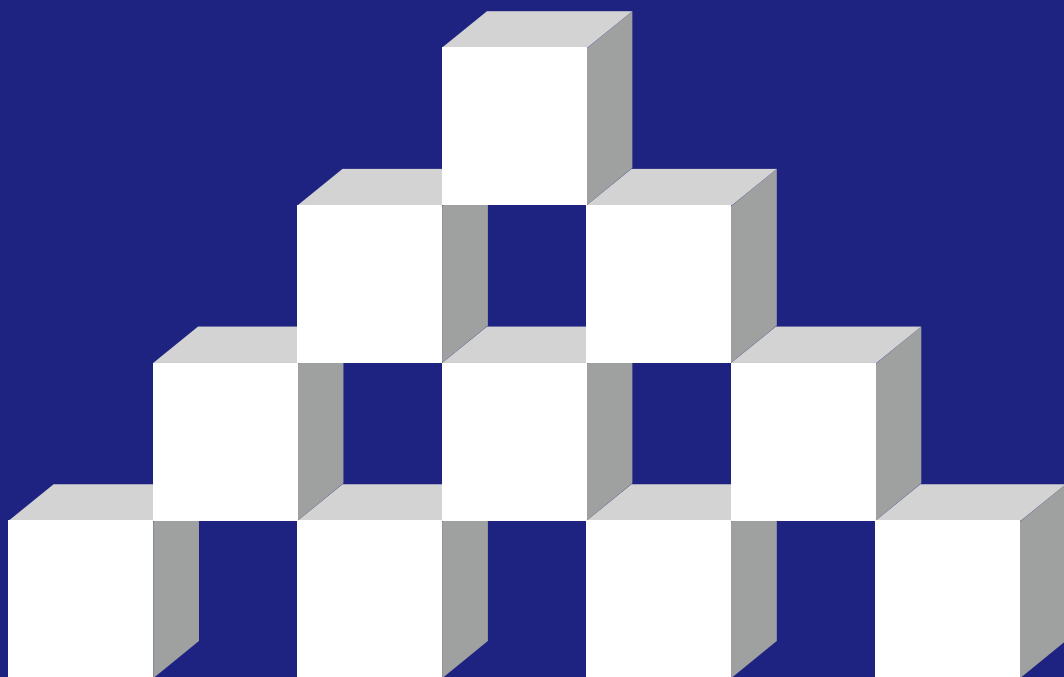


ECONO FORUM 21

No.17
March 2011

特集

「社会人基礎力」とは何だろう
～経済学を仕事にどう役立てるか～



「堅い核」と「防御帯」

経済学部長 村田 治



2010年6月14日に、小惑星探査機「はやぶさ」がトラブルを乗り越えて地球に帰還した。日本のロケット開発の父、糸川英夫博士に因んで名前がつけられた小惑星イトカワのサンプルを持ち帰ったのである。このイトカワはもともと小惑星帯の内部に位置していたのが、木星や火星の重力の影響を受けて現在の地球と火星の間を横切るような軌道を描くようになったという。このように、小惑星の軌道は近くの惑星の重力に影響されて変化する。実は、惑星の軌道も他の惑星の重力の影響を受けて微妙に変化しており、これを摂動と言う。

この摂動の観察によって発見されたのが海王星である。フランスの数学者、ウルバン・ルヴェリエとイギリスの数学者ジョン・C・アダムスがそれぞれ、天王星の観測された軌道と計算上の軌道とのくいちがいから、天王星の外側には未知の天体があり、その重力によって天王星に摂動が生じていると予測した。この予測を基に、ベルリン天文台のJ・G・ガレが1846年9月に海王星を発見したのである。天王星の存在を予測したウルバン・ルヴェリエは、水星の近日点の異常な動きを説明するために水星の内側にもヴァルカン星という惑星が存在すると予測したが、水星の内側にヴァルカン星という惑星は発見されなかった。天王星と水星の二つの惑星の摂動から、一方は海王星が発見され、他方は何も発見されなかったのである。

この二つの事実の背後には、科学の方法に関する重要な問題提起が潜んでいる。ルヴェリエはニュートン力学を用いて天王星と水星の動きを計算し、それと観測結果を照らし合わせ新しい惑星の存在を予測した。言い換えれば、ニュートン力学では説明できない天王星の摂動が、新しい惑星の存在を仮定するならば説明ができると考えたのである。実際、海王星が発見され、天王星の摂動はニュートン力学で説明が可能となったのである。他方、ヴァルカン星は発見されず、水星の摂動については結局、一般相対性理論によって説明がなされ、ニュートン力学が否定されることになった。この海王星の例を少し一般化してみると次のように考えることができる。つまり、海王星の存在のような補助的な仮説を導入して、ニュートン力学という従来の理論の延命が図られたと考えることができるのである。

このような補助仮説によってももとの理論仮説の延命が図られる点は、カール・ポパーによって提唱された反証主義の大きな問題点として指摘されてきた。これに関連し

て、ポパーの弟子のイムレ・ラカトッシュは、科学的研究プログラムの方法、あるいは科学の発展の姿として次のように論じている。科学的研究プログラムには否定的発見法と肯定的発見法があり、否定的発見法とは「堅い核」に関して否定的な推論をしないことであり、この「堅い核」を守るために補助仮説のような「防御帯」の構築が肯定的発見法であると述べている。上の例で言うと、ニュートン力学が「堅い核」であり、海王星の存在という補助仮説が「防御帯」となる。このように、補助仮説を設けることによって、元の理論は守られ「正しい」ものとして存在し続ける。ただし、その場合、包括的な定理や新しい発見などにより元の理論の内容が科学的に豊かになっている必要あるとラカトッシュは主張する。上の例では海王星の発見がこれに当たる。

自然科学の場合、実験や観測などによって「防御帯」の有効性や新しい発見などが明白であるが、経済学などの社会科学においては、実験がなかなか困難なこともあり問題がさらに複雑になる。経済学について言うならば、おそらく一方の「堅い核」は厚生経済学の第一定理に代表されるような「市場メカニズムの効率性」を前提とするものと考えられる。いわば、「見えざる手の働き」への信頼が「堅い核」を形作っていると言えよう。他方では、「見えざる手の働き」には限界があり、マクロ的な総需要と総供給が必ずしも一致するとは限らないと考える立場がある。この両者の考え方はお互いに相容れず、いくつかの論争を生み出すとともに、経済学の内容を豊かにしてきたのも事実である。しかしながら、研究者の「堅い核」への信頼が何に基づいて形成されているのかが説明されず、「堅い核」が実証研究の解釈にバイアスを与えないことが保証されない限り、経済学の客観性が疑われ相対主義にならざるを得ないと考えるのは言い過ぎであろうか。

特集

「社会人基礎力」とは何だろうか 〜経済学を仕事にどう役立てるか〜

2010年度のエコノフォーラムの特集の統一テーマは、「社会人基礎力」とは何だろうか。経済学を仕事にどう役立てるか」とした。約5年前に経済産業省により概念が提唱されて以後、大学の人材育成の一つの目標として、「社会人基礎力」という言葉が使われるようになってきている。しかし、その概念は依然として必ずしも明確ではなく、また人によって理解に幅があることも事実である。

一方、経済学部のある学生からは、経済学を学ぶことが将来的にどのような役に立ってくるのか、今一つイメージがつかみにくいという疑問がしばしば提示される。当然、学ぶことは長い道のりであり、

一朝一夕にその効果を実感できるものではない。しかし、日々の学びと、自分たちの生活や将来の仕事がどのように関係しているのかをつかめなければ、学習意欲も今一つ盛り上がりがないという心情も理解できる。

上記のような問題に多少なりともヒントを提供するために企画したのが、今年の特集テーマである。具体的には、現実の社会・経済の動きを経済学的にとらえることのようにみることができののかを理解するため、学部生諸君から提示された経済（学）に対する素朴な疑問に、専任の先生方がこたえる形で、わかりやすく解説をして頂いた。また特集の後半で

は、実際に本学経済学部にかつて学び、巣立っていったOB・OGの皆さんに、当時のゼミの指導教員とともに集まって頂き、大学時代の学びと現在の仕事について大いに語って頂いた。

経済学は、実際に社会の動向を分析し、我々の日常生活を考える上で、極めて有用なツールを提供してくれる。また経済学部で学ぶことは、社会に出てから自分で世の中の動きを読み解き、仕事の指針を作っていく上で、重要な基礎能力を育んでくれる。今年の特集記事が、経済学部での学びに対する手こたえを感じてもらおうきっかけになれば幸いである。

（編集担当 小林伸生）

携帯料金が低下しているのに、なぜ、テレコム企業は成り立つのか？

野村宗訓

表1 他業種との概要比較（平成21年度末）

	携帯電話	コンビニ	銀行	鉄鋼	家電
業界規模	9兆5,792億円	6兆5,063億円	20兆6,790億円	13兆4,168億円	64兆5,833億円
売上高純利益率	+8.6%	+0.9%	+7.7%	-0.6%	-0.1%
前年比成長率	-0.9%	-3.8%	-11.4%	-29.5%	-8.5%
総資産額	14兆1,258億円	5兆5,527億円	866兆4,346億	19兆6,007億円	70兆1,859億円
労働者数	29,245人	27,960人	156,601人	73,773人	359,996人
平均年齢	37.1歳	37.7歳	38.8歳	39.6歳	41.2歳
平均勤続年数	10.2年	10.6年	15.5年	16.5年	17.2年
平均年収	754万円	552万円	634万円	568万円	676万円

（資料）業界動向サーチ社による調査。

表2 売上高・シェアのランキング（平成21年）

	企業名	売上高（億円）	前年比	売上高シェア
1	NTTドコモ	4兆2,844	-3.7%	44.7%
2	KDDI・au	3兆4,421	-1.6%	35.9%
3	ソフトバンクモバイル	1兆7,238	+9.2%	18.0%
4	イー・アクセス	830	-12.1%	0.9%
5	沖縄セルラー	459	n.a.	0.5%

（資料）業界動向サーチ社による調査。

ケータイ市場の実態と特徴

携帯電話はカメラや音楽プレーヤーのみならず、ワンセグ、おサイフ、ゲーム等の機能が搭載されたことによって、もはや電話とは言えない機器「ケータイ」になっている。業界の概要は他業種との比較で、表1の通りとなる。売上

高純利益率は好調だが、成長率はマイナス。通信キャリアの売上高ランキングは表2のようになる。上位3社のシェアが市場の約98%以上に達する点から、明らかに寡占状態であることがわかる。売上高に関して、前年比で業績を伸ばした企業は、ランキング3位のソフトバンクモバイルだけである。

ケータイの普及と料金競争

契約数の合計は約1億1,200万件で、その内訳は表3の通りである。加入電話が約4,000万件で、年々、減少傾向をたどっているのは対照的だ。平成18年11月にナンバーポータビリティが導入されたので、以前よりも利用者がキャリアを選択できるようになり、競争環境が整備された。

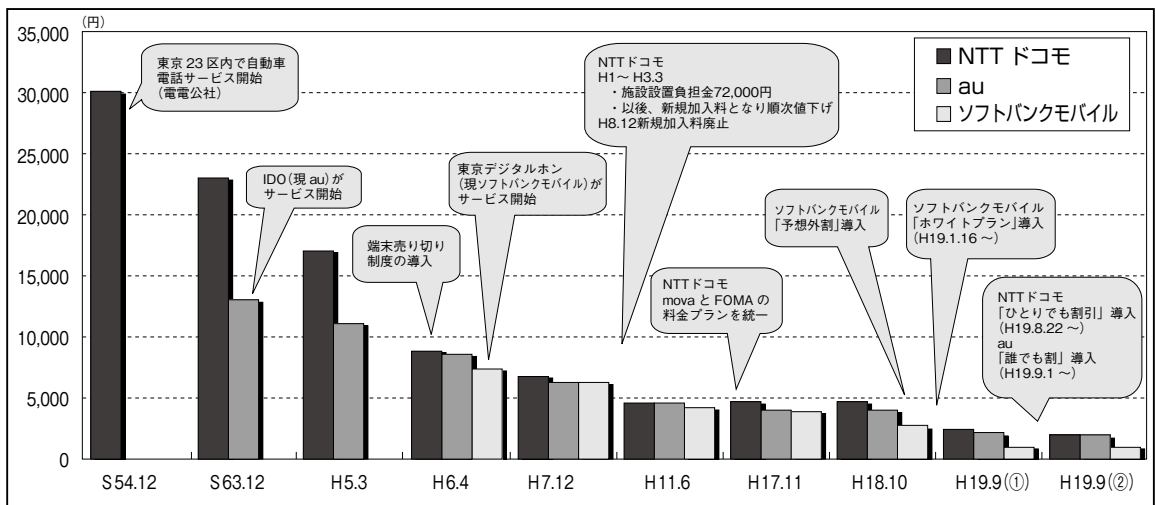
ケータイ料金は表4・5の通り、基本使用料と通話料に分けられるが、どちらも一貫して引き下げ競争が展開されてきた。実際には、家族割や無料通話サービス、パケット定額制など、複雑な料金メニューになっているので、キャリア間の単純な比較は難しい。従来のビジネスモデルは、キャリア側が端末販売店に支払っていた販売奨励金を、利用者料金から回収するものであった。しかし、これは端末価格と料金の内訳が不透明であることから、平成19年に総務省が「分離プラン」を

表3 携帯電話の契約数とシェア（単位：千）

		H.16年度		H.17年度		H.18年度		H.19年度		H.20年度		H.21年度	
合計		87,000	100.0%	91,790	100.0%	96,720	100.0%	102,720	100.0%	107,490	100.0%	112,180	100.0%
内訳	NTTドコモ	48,820	56.1%	51,140	55.7%	52,620	54.4%	53,390	52.0%	54,600	50.8%	56,080	50.0%
	KDDI・au	19,540	22.5%	22,700	24.7%	27,320	28.2%	30,110	29.3%	30,840	28.7%	31,870	28.4%
	ソフトバンクモバイル	15,040	17.3%	15,210	16.6%	15,910	16.4%	18,590	18.1%	20,630	19.2%	21,880	19.5%
	イー・モバイル	-	-	-	-	-	-	410	0.4%	1,410	1.3%	2,350	2.1%
	ツーカー	3,590	4.1%	2,740	3.0%	870	0.9%	230	0.2%	-	-	-	-

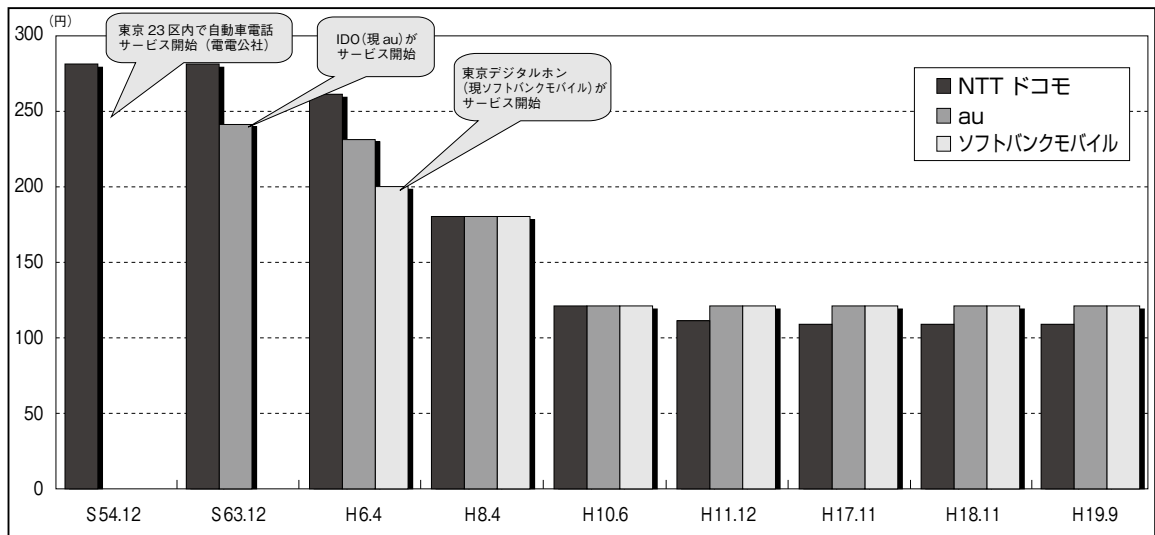
(出所) 電気通信事業者協会データ

表4 基本使用料の推移



※各社とも基本的なプランの料金。(出所) 総務省データ

表5 通話料の推移 (携帯→携帯)



※平日昼間、携帯電話に3分間かけたときの料金(税抜き)。各社とも基本的なプランでの通話料金。(出所) 総務省データ

提言した。分離プランでは、端末代金と通話・通信サービス料を分離して請求することとされている。分離プランにおける端末代金は割賦による支払いが一般的であるために、携帯電話の買い替えサイクルが長引き、需要は鈍化傾向にある。

サブバイバルのためのコラボ

人口普及率で見ると、平成13年度末に約60%だったのが、現在は約87%となっている。一人数台という状況が広がれば、100%を超える可能性もあり得るが、近年の状況から判断すると、

伸び率は明らかに頭打ちで期待できない。これまでキャリアは料金低下を契約数増加でカバーして、売上高を確保してきた。「価格×数量＝売上高」であるので、それは当然だが、問題は売上高からコストを差し引いた利益をいかに大きくするかという点だ。

現在、大手3社が生き残っている背景には、度重なるM&Aがあった。実は、料金競争で多くの通信会社が淘汰されてきた。これ以上の料金低下で独占に至ることは、独禁法上も避けなければならないので、サービスの多様化が求められる。音声やパケット以外で潜在力があるのは、電子マネーやクレジットカード機能の利用

料、あるいはコンテンツ・メディア広告からの収入と考えられる。今後は顧客管理のできる旅行、飲食、ホテルなどのサービス業とのコラボが不可欠である。

通信業界は航空のロー・コスト・キャリアのように単純に目的地間の輸送業務を行うのとは異なり、多様化したサービスをIT技術に乗せて提供する必要がある。スマートフォンを熱くしているアップルやグーグルなど、最先端企業のリーダーシップもますます重要になってくるだろう。

ギリシヤの経済危機が何故ヨーロッパ全体に響くのですか？

藤井英次

この疑問に答える上で鍵となるのは、

(1) ギリシヤが欧州連合 (European Union 以下EU) 及び単一通貨ユーロの加盟国であること、(2) 危機における

市場心理の二つです。まずはギリシヤ危機の概要を振り返り、欧州全土を巻き込むに至った理由について考えてみましょう。

ギリシヤ債務危機の概要

事の発端は2009年10月のギリシヤの政権交代でした。新政権が点検したところ、同国の政府債務残高がそれまで公表されていた規模を

遙かに上回っていることが明らかになったので、その後もEU委員会がギリシャ新政府に対して統計の不備を指摘するなどしたため、世界の市場関係者の間ではギリシャの累積債務が実際には返済が困難な危険水域に達しており、同国は近々経済破綻するのではないかとという懸念が急速に広がりました。そのような懸念が現実のものとなればギリシャ国債の償還は困難となり、その価値は紙くず同然ということになります。このため世界の金融市場では一斉にギリシャ国債を売ろうとする動きが広がり、その価格は急落しました。これにより実質的な利払い負担が増した同国経済は危機的な状況に追い込まれました。更に厄介な事にこの問題はポルトガル、アイルランド、イタリア、スペインなど他のユーロ加盟国にも飛び火し、EUの中核をなすドイツやフランスはギリシャ救済の大きな経済的負担を迫られました。これにより最終的には欧州経済全体を揺るがす深刻な事態に至ったのです。

欧州共同体と単一通貨ユーロ

ギリシャは2010年現在27カ国から構成されるEUの一員であり、そのうち単一通貨ユーロを採用する16カ国からなる通貨同盟にも名を連ねています。通貨同盟参加に際しては、財政の健全性を含め充足すべき経済的条件が取り決められています。しかしながら、財政は基本的に国ごとに独立しており、その政策権限は加盟国の政府に帰属します。一方、通貨同盟国の金

融政策は欧州中央銀行(Eurocentral Bank)が一手に担っています。つまりこれらの国は、財政は(EUによる縛りはあるものの)基本的には国別、通貨・金融は運命共同体という仕組みにあるわけです。このような制度の下では、ある国の財政政策の不備で生じた問題の影響は当該国だけでなく他の同盟国にも広がります。今回の危機の場合、政府債務の膨張自体はギリシャ独自の問題といえますが、金融市場におけるギリシャの信認低下は同国のみならずドイツやフランスを含む他の15カ国の通貨でもあるユーロへの信認低下を意味します。ギリシャ国債が一斉に売られるということとはユーロ建て債権が一斉に売られることを意味し、外国為替市場におけるユーロの暴落はユーロ加盟16カ国全てにとって自国通貨の価値の喪失を意味するわけです。

市場心理： 自己実現と危機の伝染

ユーロ加盟国の中でも今回ギリシャ危機の影響を特に強く受けた国にポルトガル、アイルランド、イタリア、スペインが挙げられます。これらの国に共通するのは、ギリシャ同様に経済規模に対して政府債務の水準が高いことという点です。(政府の債務から資産を差し引いた純債務残高のグラフを参照)ギリシャを含めたこれら5カ国はその頭文字を取ってしばしばPIIGSと呼ばれ、ユーロ加盟国の中でも特に財政運営に不安が多い国と目されてきました。このため、ギリシャの債務危機が発生すると、多

くの投資家が上記4カ国もギリシャ同様に債務返済が困難な事態に陥るのではないかとという疑心暗鬼に陥りました。その結果、これらの国の発行する国債も大量の売りを浴びせられてしまったわけです。

このような市場心理の変化が国際金融市場に及ぼす力は絶大で、投資家の憶測が正しいかどうかには関係なく、多くの市場参加者が危ないと判断すればその通貨建ての債券は売りたたかれることとなります。結果的に国債の利払い負担が急増し、もともと危機的ではなかった国の財政が実際に危機的状況に陥ってしまう可能性すらあります。このように「もしかしたら危機が起これるのではないか」と市場が予想するだけで、実際に危機を引き起こしてしまうケースは自己実現的危機(self-fulfilling crisis)と呼ばれています。また、今回のように一国の危機が他国に飛び火していく現象は危機の伝染(contagion)と呼ばれます。

EU中核国の苦悩

通貨同盟内で今回のような経済危機が発生した場合、他の加盟国はどのように対処すべきでしょうか。ドイツやフランスなどEU主要国は危機に陥った国の自助努力を主張して事態を傍観すべきか、それとも自ら経済的負担を引き受けてまで救済に乗り出すのかという難しい選択を迫られます。当初は救済に積極的なフランスと消極的なドイツの足並みの乱れが目立ちましたが、最終的には何らの救済措置も施さずにた

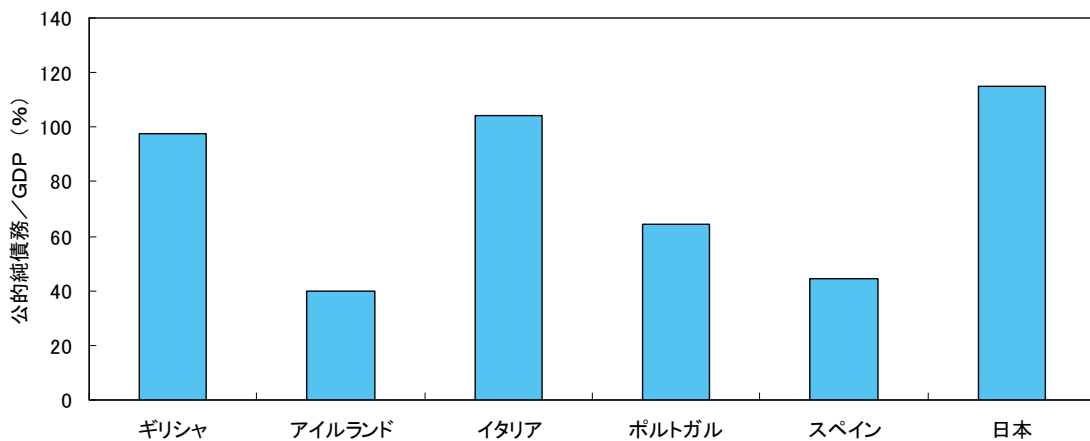
だ傍観するという選択は避けざるを得ないでしょう。なぜなら同じ通貨を採用する同盟国が経済破綻すれば、ユーロ体制或いはEUそのものの信頼性に致命的な傷を残すことになるからです。たとえそれがギリシャ特有の事情に端を発した危機であっても、共通通貨を採用している以上は加盟国全てが世界の金融市場で自らの通貨の信認喪失という事態に直面します。万一危機に陥った国が通貨同盟、ひいてはEUから脱落するような事態が発生すれば、そもそもEUやユーロ体制自体の存続の可能性に世界の市場が大きな疑念を抱くようになるでしょう。

この様に考えると今回のギリシャ危機は、類似した債務問題を抱えている他の同盟国に飛び火するだけでなく、ドイツやフランスなどのEU主要国にも大きな経済的負担を強いるものであることが理解できます。当然ながらドイツやフランスの国民の間には、「なぜ緩慢な財政運営によって危機に陥った他国を、自分たちの血税をつぎ込んでまで救済しなくてはならないのか」という強い不満が渦まいています。しかしこれらの国の政治家や政策担当者たちからすれば、EUや通貨同盟の崩壊だけは避けなければならぬという事情があるわけです。その結果、欧州各国は2008年の世界金融危機からの十分な回復を達成する間もなく、ギリシャ債務危機への対処に更なる経済負担を強いられ、EU経済の見通しは一層不透明なものになってしまいました。

危機の教訓

今回のギリシャ危機は、財政赤字を放置し続ける国は早晚債務返済が困難な危機的状況に陥ることを如実に物語っています。その意味において日本に暮らす私たちにとって、ギリシャ危機は決して遠い国で起こった他人事ではありません。実は日本の公的債務の状況はPIIGSのそれよりも悪いのです。(グラフ参照) 国債の大半が国内保有される日本とギリシャでは事情が違ふという指摘も聞かれますが、「返済の先延ばしで際限なく借金を続けることは出来ない」という点では世界中のどの国も同じです。ギリシャ危機を良い教訓と捉え、日本においても財政再建に向けた政策の早期実現が極めて重要といえるでしょう。

2010年現在 一般政府純債務残高の対GDP比率
(データ出所: OECD Economic Outlook No.82)



イラン・北朝鮮はなぜ核開発を進めるのか？

松枝法道

最初にお断りしなければなりません。私の専門は軍事問題の分析でも、北朝鮮、および、イランの政治・経済でもなく、以下に述べる話は新聞、テレビなどから自然に入ってきた情報のみに基づいて、ゲーム理論の初歩的な考えを用いると何が言えるのかを考えた「私の個人的見解」に過ぎません。大きく誤った事実認識があるかもしれません。どうかお許しください。みなさんが講義で研究レポートを課せられたときは、ぜひ図書館に足を運んで新聞記事を検索し、専門書にも何冊か当たってくださいね。

まず、一般的なゲーム理論の大前提として、すべての登場人物が合理的、つまり、どのような性質のものであれ「自己」の目標がちゃんとわかっていて、それを達成すべく行動を選択している、という仮定があります。ここでも、国のリーダーがその場で気まぐれに意思決定しているということは想定しません。また、ゲーム理論で分析する状況は、自分の目標を達成する上で、他の登場人物の行動が関わってくる「戦略的状况」と呼ばれるものです。戦略的状况においては、他の登場人物の思考プロセスを読んで、あるいは、その行動を注意深く見て（ただし、相手の行動が見えない方がかえってよい場

合もあります）、自分の行動を決める必要があります。その相互作用の結果がどうなるのかを考える道具がゲーム理論です。ゆえに、ゲーム理論はここで取り上げる軍事的な衝突の可能性を含んだ外交の問題を分析するのに欠かせない視点の一つと認識されており、ゲーム理論の入門書にも同様の例が含まれています。この短文を読んで、内容はよくわからなかったが、もう少し勉強してみたらひょっとすると面白いかもしれないと感じてくれた方は、梶井厚志著「戦略的思考の技術（中公新書）」を手にとってみてください。

ここからが本題です。「核兵器の開発」をここでは外交カードの一つとみなします。つまり、核兵器を開発しようとする国のリーダーを含めて当事者全員が、核兵器の使用は全面的な軍事衝突を招き大きな損失に（場合によっては人類の消滅に）つながることを認識しており、核兵器開発の主たる目的は相手から外交上の譲歩を引き出すことにあると考えます。さらに話を単純にするために、核兵器を開発する動きは「強硬」な外交姿勢の表れであることを意味するのに対し、北朝鮮やイランのような政情の国において、何も動きを起こさず、おとなしく現状維

持を続けることは、外交関係における実質的な「譲歩」に当たるとみなされ、国内においてもリーダーの覇権が揺らぎ、その失脚につながる可能性が生じると考えましょう。今、二つの国の間の外交関係のみに注目し、それぞれの国のリーダーは、「強硬」か「譲歩」のどちらかを選択するとします。すると、起こりうる状況は、両国が「強硬」姿勢をとる、片方の国が「強硬」でもう一方が「譲歩」をとる、両者とも「譲歩」をとる、の3つのパターンの結果が可能性としてあることがわかります。

続いて、ゲーム理論を用いるためには、それぞれの結果をリーダー達がどう評価するのかを認識することが重要です。両者とも「強硬」姿勢をとって軍事的な緊張がエスカレートする状況は互いに好まないというのが通常の神経のようには思いますが、軍部など現政権の転覆をもくろむ国内の強硬派勢力をなだめるためにも、決して対外的に「譲歩」姿勢は取れないというような状況も場合によっては存在すると考えられます。つまり、外交というテーマに限っても、登場人物の好みや、周囲の環境の特徴によって、多種多様な戦略的状况が起こります。ここでは、さらに具体的な議論をするために、外交関

題が「チキン・ゲーム」と称されるバターンの状況として記述できるケースに限定して話を続けます。

チキン・ゲームのイメージとして、2台の積荷をのせたトラックが田んぼの中の一本の細い「あぜ道」を向かい合って走行しており、時間とともに車間距離が近づいてきている状況を想像してください。もし双方がこのまま直進すると、正面衝突を起し、大事故を招いてしまいます。積荷が可燃性のものであれば、事故により命を落とす可能性も高まります。また、ここでの「譲歩」は田んぼにはまってしまうことを意味しています。大惨事は避けられますが、後始末を考えるとそれほど有り難い結果ではありません。この戦略的狀況が一回のみ生じる場合、ゲーム理論はどのような状態が結果として起こると予想するでしょうか？それは、片方が「強硬」姿勢を貫き、もう一方が「譲歩」をするというものです。(もう一つ、特に相手の素性のはっきりとわからないときに、あたかもルーレットを回して、その結果に従うかのように確率的に行動を選ぶように見える「混合戦略」というタイプの戦略も含めたゲームの結果を予測することもよく行われ、理論上だけでなく、実際に興味深い示唆を与えてくれるものなのです。が、紙面の都合から触れないことにします)。双方が譲り合うことは起こりませんが、その反面、お互いに強硬姿勢をとって軍事衝突が起こることもありません(ただし、勝手な軍部の暴発のような不確定要素が存在する場合は話が異なります)。

重要なポイントは、上の情報のみからでは、

どちらが「譲歩」することになるのかについては決まらないことです。ここで外交カードの一つとして核兵器を開発することが意味を持つてきます。世界的に広がりつつある核兵器の拡散防止の流れに逆行して核兵器を開発するような行為は、その国が外交交渉全般において強硬な姿勢に出る傾向が高いという「評判」を築いているともとらえられます。北朝鮮は核兵器の開発に成功したときに、それを秘密にするのではなく、かえって核兵器を作る能力を保持するに至ったことを盛大に国際社会に対してアピールしました。スポーツのゲームにおいては、試合前に手の内を隠すという行動がよく見受けられるのに、わざわざ重要な兵器の存在を明かすのはなぜでしょうか？実は、そのようなアピールも強硬な姿勢を取り続ける国であるという評判を築くための行為と考えると、容易に理解できます。隠していたのでは強硬派としての評判は立ちませんからね。また、国の独裁的リーダーとしては、国内の強硬派に歩み寄ることで、内部からの反乱の可能性を小さくする効果もあるかもしれません。これら強硬派と仲良くすることは、いったん核兵器の開発に成功すると、国際社会に対する脅しの信憑性を高める上でも役に立ちます。つまり、当初は、「あのリーダーは圧力をかければ、最後まで持ちこたえることはないだろう」と外交交渉の相手に思われていたとしても、「外からの圧力に屈したという形になれば、国内の強硬派を裏切ることになるので、彼らから失脚に追い込まれ、それを恐れてリーダーはいちかばちかの賭けにでるかもしれない」という考えを他国の交渉者に植え付ける

ことができるかもしれないのです。

このような核兵器開発のねらいを一言にまとめると、強硬という戦略をとることに対して「コミットメント」を行おうとしていると言えます。コミットメントとしては、撤回が困難で、それが相手に明確に伝わるものほど、より役に立つものになります。評判を築くことも、国内の強硬派と信頼関係を築くことも、このコミットメントが強固なものであると国際社会に知らしめるのに一役買います。このように自分の行動を制約するコミットメントを打ち出すことにより、相手の譲歩を引き出すことができるかもしれません。先のあぜ道のトラックの例では、運転ハンドルを取り外してしまうとか、隣に怖いお兄さんに同乗してもらって、「もしハンドルを切ろうものなら、えらいめにあうぞ」というような理不尽な脅しをしてもらうことにより、自分が直進できる可能性が高まります。もちろん、それが相手にはっきりと見えてないと意味がありません。

紙面の都合上、今回はここで話を終えなければなりません。このように「自らの選択に制約を課すことが得になる」というような結果は、戦略的狀況であるからこそ生じたものです。友人関係から外交問題まで、世の中には戦略的狀況があふれています。ゲーム理論を勉強することを通じて、そういった状況について考えみることが楽しいと感じられるかもしれません。おまけに今後の人生において意外と役に立つかもしれませんよ。

消費関数や貯蓄関数を学ぶことにより、今後人生でどうかしていいけるのか？

岡田敏裕

提示された質問は「大学での経済学の学習は今後人生にどうかしていいけるのか」と、かなりの部分で同義であると思います。より広く「大学での学習」としても良いかもしれませんが、ここで以下では大学での経済学の学習全般ということ意識して議論を進めていきます（以下の意見は限られた経験から私が考えるところであり、他の大学教員が同意するかどうかは分かりません）。

大学で職を得る以前は、私は大学と大学院で経済学を学び、金融関係の仕事（経済調査）を数年間していました。このように書くとき学生の時に学んだ経済と経済学の知識が仕事において非常に役立ったのだらうと思うかもしれませんが、直接的に役立ったという経験は数少ないと思います。役立った経験が少ないとは、金融関係の仕事に就いたからといって、経済あるいは経済学の知識を大いに駆使して仕事を有利

に進めたということはそれほどないということ、ある程度の教養があれば本や資料を読めば他学部卒の学生でも十分に対応できたということとを意味します。個人差もありますが、私の場合は経済と経済学の知識は時間的にも能力的にも他学部卒の学生との間にそれほどの差を生まなかったと思います（当然、知識量が不十分だった可能性もありますが、私は標準的な学生であつたと思います）。

学生の中には、大学で経済学を学ぶことで多くの知識が得られ、その知識を社会で直接的に大いに活用できるのではないかと考えている人がいるかもしれません。更に、大学での学習の重要度を、社会での知識の有用度という点で判断している学生もいるかもしれません。例えば、「社会で直接役立たなそうな知識だから、この科目は勉強する気が起きない」などの意見です。このような考えの根底にあるのは、知識自体が

非常に重要であるという考えだと思えます。もちろん知識は重要であり、土台としてある程度はなくてはならない物ですが、それ自体だけに目が言ってしまうのは短絡的でしょう。確かに消費関数などの知識は特定の仕事では非常に役立つものです。例えば、マクロ経済系の調査や分析を行っている研究所あるいは政府機関の経済分析部ではマクロ経済の動向の予測や分析を行うために、消費関数やその基礎となるマクロ経済学の知識は非常に重要です。マクロ経済を予測したり、ある政策のマクロ経済への影響などを分析したりするためには、実際のデータを、使用し定量的に分析することが必要ですので、消費関数などの知識が大いに役立つ場合もあります。しかし、消費関数の知識も含め大学で学ぶ知識の多くは、その専門性故に直接的な有用度は極めて限定的になってしまいます。大学で得た経済学の知識は限定的な効果しか発揮でき

ませんが、企業で営業職に就いたとしても、公務員になったとしても、経済の研究所に就職したとしても、大学院に進学したとしても、経済学を学ぶことによって社会で広く役立つものを得ることが出来ます（知識以上に重要なことです）。

知識の習得以外に経済学の学習から得られる重要なものとは何なのでしょう。それは、学習過程で頭を動かして考えることによって身に付けることが出来る思考力や分析力であると思います。私の場合はそれらが社会に出て非常に役立ちました。消費関数や貯蓄関数を学ぶ時に皆さんは経済学（マクロ経済学、あるいはミクロ経済学）の理論を学習すると思います。その過程で真剣に取り組む学生はしっかりと頭を使う（論理的に考える）ことになるでしょう。疑問を持ち教科書を読み、時には先生に質問する学生もいるでしょう。消費関数を真剣に学ぶ学生は、問題を発見し（疑問を抱き）、その問題を解決するために論理的に物事を考える訓練を積み、その結果として思考能力の向上を手に入れることが出来るのです。また、実際のデータを使用し消費関数の推計を行う学生もいるかも知れません。どのデータを使用したらいいか、データの問題点は何なのかなどの疑問点を見つけ出し自分で考えることにより、分析能力も手に入れることができるでしょう。私は大学で経済学を学び、実際のデータ分析を多く行いましたが、その時学んだ様々なこと（統計の知識、データの扱い方、数値分析ソフトの使用など）はその後の仕事で大いに役立ちました。

目的意思を持ってしっかりと経済学を学習すれば論理的思考力と分析力を身につけることができますが、この二つが社会に出てどのように役立つのかをもう少し具体的に考えてみましょう。例えば会社であるプロジェクトを任せられ、上司に「・・・のような新商品を開発したらどうか」と思っているが、どのような層の人々をターゲットにして、どのような販売戦略を立てたらいいか分からないので調査してくれ」と言われたとします。そんなことが重要でしょうか。大学で学んだ会計の知識でしょうか、ミクロやマクロ経済学の知識でしょうか、金融の知識でしょうか、商法や税制の知識でしょうか。大学で学んだ知識は直接的に多少は役立つかもしれませんが（例えば、その会社が属する業種の形態や特性など）、最も重要なことは筋道を立てて考え、分析する能力でしょう。この例のような場合には先ず始めに、その商品についてしっかりと理解し、商品の特性や性質を考え（理論を作り）仮説を立てることが重要でしょう。上司に説明する時に、あなたは次のように報告することが必要です。「ある世代のA、B、C、

に基づいた販売戦略および費用等も計算できません。しかし、上司への報告はこれだけでは不十分でしょう。次に必要になるのは、理論に基づいた仮説が正しいかどうかになります。もし間違っていたら、その仮説に基づいた販売戦略にかかる費用が無駄になってしまからです。したがって、上司に報告する場合は、その仮説が正しいと判断する客観的根拠を示す必要があります。つまり、統計データ、アンケート調査などのデータを使用した客観的な分析です。

論理的思考力と分析力を身に付けるのは簡単、あるいは既に持っていると考えられる学生もいるかもしれませんが。しかしながら、高校までの学習ではこのような能力の開発にあまり力を入れていないようなので、多くの大学生はまだ不十分であるように見受けられます。あるいは、その重要性にさえ気付いていない学生も多くいるように感じられます。論理的思考力と分析力を身につけるには時間がかかります。また、知識力と違い達成度も見えにくいのです。しかしながら、日々の努力によってそれらの能力は徐々に向上していくものです。単位や高成績を取ることを目標とせず、論理的思考力と分析力の向上を目指して経済学を学ぶことを心がけてみてください。経済学はそれらの力を養うのに最も適した学問の一つだと確信しています。成果を出すには時間がかかり実感もしづらいと思いますが、いつかは効果の大きさと重要性を感じる時が来るでしょう。

というような特質を持つ人たちにむけて販売するものが良いのではないのでしょうか。何故ならば：のようない理由からです。：の部分には理論（理屈）が入ります。その理論を作るために必要な知識の多くは大学では学ばないもので、本や資料、あるいは会社の同僚や先輩から得るべきものでしょう。重要なことはそれらの知識を基礎にして自分の頭で考え、理論を組み立てる力です。適切な理論・仮説が立てられれば、それ

経済の講義全体で登場するモデル等は、かなり単純化されたもので、モデルで表しきれない場合が多いのだから、あまり極端に単純なモデルだと本当に導きたい答えが出てこないのではないか？

新海哲哉

「モデル」分析は、そもそもある変量 y に影響を及ぼすのは、たくさんの原因となる変量の候補は x_1, x_2, \dots, x_n などあるけれども、そのうちで、ある理屈を考えると x_3, x_4 が主に影響を与えると考えられるとき、 x_3, x_4 以外の8つの変量は、考慮の対象から除いて(捨象して)、(仮説を立てて $y \parallel f(x_3, x_4)$)と考え、関数や対応 f の性質を調べるといふ分析手法です。

確かにまだモデル分析に慣れていない学生諸君は、現実の経済での出来事は、いろいろな要因が複雑に絡み合っただけ起こっているのだから、極端に単純なモデルでは現実の経済の動きを分析したり、実際に不況対策や社会保障の制度変更などの政策を考えることはできないと思うかも知れません。しかし、経済学以外の自然科学も、例えば50年以上前にノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹氏も、紙と鉛筆だけを使って、

数学的なモデルで物理現象の理論を考え、評価されました。そしてその後彼の理論の妥当性が、実験で検証されるという、モデル分析と実験によるそのモデルの妥当性の検証し、不具合があればモデルを立て直すというプロセスで、物理学は発展しています。工学や物理学では、実験環境を整えて、モデルで用いる変量以外を一定に保ち(捨象して)、主に影響を与えているとモデルで仮設した変量(先の例では x_3, x_4)のみの量を増やしたり減らしたりしたとき、変量 y への影響を調べることができます。

「現実の経済現象の分析では、人々の経済行動を一定に保つなどということは、物理学や工学での実験と違ってできないじゃないか！」と反論する諸君もいるかも知れません。しかし、自然科学でも、実は実験が簡単にはできないけれども、モデルによる思考が使われているもの

もあります。例えば、医学です。学生諸君は、人間の身体はとても複雑な相互依存の仕組みが組み合わさって、その機能を維持していますので、単純なモデルの手法では扱えないだろうと思うかもしれません。

ところが、臨床医学でもモデルの考え方は重要で臨床医たちに使われています。これらの医師も痛みを訴える患者さんに「実験」をすることはできませんが、彼らはモデルを立てて、診断と治療方針の決定を行います。

例えば、「肩が痛い」という患者さんが病院に来たとき、医師はまずは「肩の骨や筋肉になんらかの原因で異常があつて、それが炎症を引き起こし方の痛みとなっている」というモデルで仮説を立てて、外科や整形外科的な検査をします。その結果検査で異常が見つかれば、仮説が正しいと「検証」され、診断(病名)が付い

て治療方針を立てます。しかし、検査で「肩の骨や筋肉に異常がない」場合には、他の疾患「例えば特殊な心臓の狭心症か、軽い心筋梗塞」が、原因で「肩に痛み」が出ているのではないかと」というモデルによる仮説を立てて、この仮説を検証するために数時間を置いて血液検査をして、「心臓病のときに血液に増える物質」が時間の経過とともに増えていないかなどを調べて、「心臓病が肩の痛みを引き起こしているのでは、その原因の心臓疾患を治療しなくてはならない」と診断することになります。このように医師は、「肩の痛み」を起こす原因を、患者への症状の問診や皮膚の色の変化等から、直感的にモデルを立てて、検査で「検証」し治療方針を決めます。そうした「検査」でも、「診断」が付かないときは、とりあえず、自分の立てたモデルに従って、「肩の痛み」を鎮める投薬をして、症状が治まるかどうか確かめます。（これがあらゆる種の実験かもしれません。）

経済学も臨床医学と似ています。「物価が下がり、国内総生産が縮小するデフレ克服のために」、日銀はあるモデルを想定して、「為替介入」をしつつも、さらに「国債や有価証券を買い入れて、市場にお金をじゃぶじゃぶ供給してみる」という、モデルで仮設した変量（先の例では $regret$ ）を動かして、変量 y への影響を見て仮説を検証しながら、モデルを変更して次の政策を考えます。

このように、単純化されたモデルで複雑な現象を考えようとすることは、複雑な人体の相互依存する機能や経済の働きに働きかけるとき、

臨床医が病気の診断をしたり、日銀や政府の経済政策策定者が経済政策を考えたり、日本全体の経済状況に影響を受けながら、様々な経済活動を行う、企業や私たち個人がものごとを決めるときにも使える考え方です。物理学や医学、経済学が使うモデルは、それぞれの学問分野で理論的仮説が蓄積されていますが、おそらくは現実の経済で意思決定している実務家も、学問的にはきれいに整理されていないにしろ、自分のこれまでの経験から知らず知らずのうちに、自分の頭でモデル分析的思考をしているのではないかと思えます。もちろん、経済学で用いるモデルの中には、1つか2つの変量で経済現象を説明しようとする簡単なモデルだけでなく、多くの変量で説明する複雑なモデルもあります。

しかし、「高等学校レベルまでこれを学びなさい。」と文部科学省の指導要領や、教科書検定などで決められた、国語、数学、理科、社会、外国語等の科目を勉強してきた諸君には、まだ、こうした「モデル」で分析するという考え方は、初めてでわかりにくいものです。ですから、「経済学の講義では、こうした「経済学的なもの」の見方」でこれまで経済学でよく使われた「簡単なモデル」を繰り返し、教えてこれを用いることによつて、「モデル分析」によつて経済現象を掴む練習をしてもらっているわけです。これは中学の数学の問題でも、最初は公式を当てはめればすぐできる「因数分解」もあれば、いくつかの考え方と着想を組み合わせて解く応用問題があるとき、まずは簡単な「因数分解」など

基本的な考え方を繰り返し教え、練習問題を解いてもらうのと似ています。

したがって、「簡単なモデル」で、1. 仮説を「モデル」を使って立てる、次に2. データでモデルが正しいかどうか「検証」する（このときに「統計学」が役に立ちます）。正しければ3. 政策シミュレーションをしてみる（こうしたら、どのくらい経済に影響するのだろうか？消費税を15%にしたら経済はどうなるだろう？）というのを、データで推定した計量モデルでシミュレーションしてみる（このときに、計量経済学が役に立ちます）、という考え方は、望ましい答えを見出す有効な手段の一つだと思えます。

最近では、現実の観察から理論経済学者が直感でモデルをたてるだけでなく、実際に、経済を考えるとときに、モデルをたててそれをゲームで表し、実験をしてデータをとって、従来の経済学の理論では説明できなかった、人間の心理的、情緒的経済行動を明らかにしようという「行動経済学」の研究も盛んになってきています。しかし、この「行動経済学」においても「モデル分析」の考え方は、とても重要な考え方で「行動経済学」を学ぶ上で不可欠だと思えます。

「経済学で言うところの経済人」は存在するのか？

猪野弘明

本稿を執筆するにあたって私のところに寄せられた質問は「経済人は存在するのか」というものであった。「経済人」とは経済学で前提とする人間像であり、自らの利益を最優先し、かつそのために最善の手段をとる人間のことであり。本稿では、仕事上の人間関係を考えるうえで有用な「ただ乗り問題」を例にとり、経済人について考えてみよう。

社会に出るとチームで仕事をしてひとつの成果を目指す機会がますます増えていく。もちろん大学の間にも、例えばグループ学習による発表など、様々な形で似たような経験はしてきているであろう。さて、このような経験のときに、自分は他の人よりずっと努力をしたのに、達成された成果は全体のものになってしまい、不満を感じたことはないだろうか。グループ学習でさぼっていた人にも他のメンバーの努力によって達成された発表の高評価が加わり、ずるいと

感じることはよくありそうなことである。

実は、これは経済学で公共財の「ただ乗り」問題として知られる現象である。皆で共有するひとつの成果は公共財である。個人々の努力は（成果が皆のためになるので）その努力以上に全体の合計利得を高めるが、しかし個人的に得られる利得は（成果は皆に分散するため）自分の提供した努力に見合わない、という状況がこの問題の本質である。このようなとき、個人の観点からは努力を惜しむインセンティブ（動機）が発生し、全体の観点との不一致が生じる。全体のことを考えて努力を提供した者から見ると、この個人インセンティブに従って努力を惜しみつつ成果を受け取る者はただ乗りをしているというわけである。

チーム内のメンバーが皆、冒頭で述べたような自らの利益のみを最大化する経済人であると、全員が他人の努力にただ乗りをしようとし

て努力を提供しない。この結果、チーム全体で全く努力が行われないう最悪の事態を招く。これが経済学の教えるところである。ところが現実の世界に目を向けると、多くの人が全体の成果を旨ざして努力した経験があるだろうし、ごく一部ならまだしも、常に全員がただ乗りをしようとして協力的体制が崩壊するとは限らない。人間は経済学が仮定する経済人とは異なっているように見受けられる。

だが、現実には経済理論の結論と異なる現象が多く見られるということだけで、経済人を想定する経済学に意味がないと結論付けてしまうのは早計である。物理理論が、純粋な真空・適切な温度などの環境下で定式化され、その理論的結論があるとき現実に起こったことと一致しなかったからと言って、物理学が意味のないものと解釈することはあまりないであろう。現実はいろいろな要素が絡み合い複雑である。このた

め、物理学などの自然科学では、理論の妥当性を検証するために、実験室で他の条件をできるだけ排した理想的な状態、いわば「純粋な真空状態」を作り出し何度も実験を行う。社会科学である経済学では、自然を相手にする物理学などとは異なり対象は人間であるため、「純粋な真空状態」を作り出すことは容易ではない。しかし、近年発展してきた実験経済学という分野では、他の条件をできるだけ排したゲームを作り、現実とは切り離れた実験室に集められた被験者にプレイしてもらうことで、理論の妥当性を検証しようとする。経済的なインセンティブをなるべく正確につけるために、被験者が受け取れる実際の報酬がそのゲームで挙げた点数に依存して増減する。

実は、公共財のただ乗り問題は、「公共財ゲーム」と呼ばれる経済学における実験がいろいろな形で行われ、その結果がかなり蓄積されている現象である。このゲームの理論値は、ただ乗りのインセンティブによってまったく努力を提供しないように設定されているが、多くの実験の結果では被験者は自身のもてる努力の40〜60%ほどの努力を提供している。しかしこれは最初にゲームをしたときの値であり、繰り返し公共財ゲームを行うとだんだん努力の提供量は減っていき、最後には(多くの実験では10回ゲームが行われている)平均して75%の被験者が全く努力を提供しなくなる。公共財ゲームにおいて人間は、当初はチーム全体のために努力提供をするという現実的な行動をするが、現実から切り離された実験室でゲームを繰り返すうち

に、長期的にはおおよそ経済人的な行動をとるようになる。

このような現実と理論・実験の差はどこから来るのであろうか。これは複雑な現実には存在するが純粋な実験・理論では排されているものによく目を凝らすことで見えてくる。例えば現実の仕事や講義では、グループ全体が挙げた最終的な結果のみではなく、チーム内の個人々の努力具合もある程度観察されており、評価の対象となつているかもしれない。しかし実験では、点数となるのはあくまでチームの成果になるよう制御されている。また、現実には長期的な人間関係も重視されているかもしれない。繰り返し同じチームとなつて仕事や学習をする相手であれば、ただ乗りをすることで信頼を失うことは痛手である。また今回限りの相手であったとしても、そこから今後の人間関係が発展するかもしれない。一方、上記の実験結果は、ゲームごとに匿名性を保ちつつランダムにチーム分けされる場合のものであり、今後の人間関係は排されている。

また、理論と実験の結果に差が生じることもある。たとえば、公共財ゲームの後に他の被験者に罰則を与えることができるオプシオンをつけると、実験における協力体制は飛躍的に向上し、最後のゲームでも自身のもてる努力の75%ほどの努力を提供する。これはもちろん、ただ乗りに対して人々が罰則を与えるからである。しかし理論的には、罰則はゲームの成果が成就した後のオプシオンであるため、結果を何も変えないはずである。それどころか、この実験で

は、人に罰則を与えるには自分自身もそのためのコストを負わなければならないよう設定されている。経済人ならばこのような得にもならない仕返しに労力を割かないはずである。しかし、人間がもし自らのことを考える経済人ではなく、チーム内の公平性を重んじる心を元来備えているのだとしたら、実験をいくら「純粋な真空状態」に設計しても、被験者が人間である限りは不公平に憤つて罰則を与えることはあるだろう。

ここまでに挙げた議論を見るだけでも、「全体の最終的結果のみでなく個々を見ること」「長期的な人間関係」そして「公平性を重んじる心」などの協力における重要性といった、いかにも人間臭い事項が浮かび上がってきた。いずれの事項も、経済人と現実・実験における人間を比較検討することによって、かなり理論的に浮かび上がってきたことは驚きではないだろうか。経済学における経済人は架空のもので、状況が複雑になるほど事態を予測するには不足になるかもしれない。しかし現実との差がある時こそが醍醐味である。経済人を基準、いわば「ものさし」として、差によく目を凝らせば、数々の重要なことが意識的に整理され見えてくる。そして、状況が複雑になるほど、できるだけ単純だが確固たる「ものさし」をもって状況を眺められることは、有効な力となるのである。

参考文献・実験結果は、「Theories of Fairness and Reciprocity - Evidence and Economic Applications」Fehr & Schmidt (2001) の記述に依った。

●エコノフォーラム座談会●

「経済学部での 学びと仕事」

学生たちとの会話の中で、大学での学びや4年間の生活が社会に出てからどのように役に立つのかという、率直な疑問が提示されることがある。そこで今年の特別企画として、関学経済学部にかつて学び、社会に巣立っていったOB/OGの方々やゼミの恩師にお集まりいただき、当時の学び・大学生活や、現在の仕事とのつながり、そして現役学生へのメッセージ等を直接語っていただいた。学生諸君の、大学での学び・生活への指針になれば幸いである。

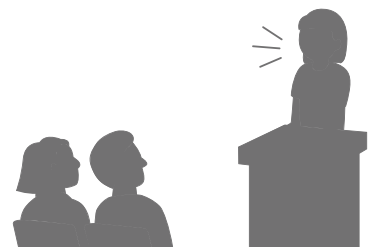
■日時：2010年10月30日（土） 午後3時～5時

■場所：経済学部2階会議室

■出席者（五十音順）

卒業生：磯井歩美さん（村田ゼミOG、食品卸会社勤務）
中筋万里さん（平山ゼミOG、損害保険会社勤務）
細川直人さん（田中ゼミOB、生命保険会社勤務）
松尾健一郎さん（藤井ゼミOB、教育関連企業経営）

教員：田中敦教授、平山健二郎教授、藤井和夫教授、村田治学部長
司会：経済学部 小林伸生 記録：経済学部事務室 田中佐幸





小林 それでははじめさせていただきます。今年度のエコノフォーラムの特集テーマとして、最近大学教育に求められることとしてしばしば登場する「社会人基礎力」について、改めて考えてみたいと思います。学生からは経済学が社会に出てからどのように役に立つのか、という素朴な疑問がよく出されます。そこで、今年度経済学部では、OB／OGの方々が社会に出てからどのように活躍し、それぞれの現場において当時の学びがどのように生かされているのかについての情報発信を意識的に行っています。その一環として、今日はそれぞれの世界で活躍しているOB／OGの方々に、学生時代の皆さんの学びや生活、そして現在の仕事等について、自由に語って頂きたいと思っております。それでは、まず自己紹介をお願いいたします。

細川 2002年経済学部卒業の細川です。現在は生命保険会社でファイナンシャルプランナーをしています。個人・法人の保険の提案をしています。卒業後、しばらく事業創造・提案等を行う会社に勤めた後、2度ほど転職をして現在の職場に勤めております。

中筋 平山先生の関学でのゼミの第一期生です。平山ゼミは第一期生のときは大人気でした。いえ、第一期生のときも、です（笑）。ですので、当時平山先生が勤めてられていた前任校の関西大学に押し掛け、「ゼミ生にしてください！」とお願いをした思い出があります。その甲斐があつて、ゼミに参加させていただくことができ、金融のゼミであったこともあり、大学卒業後は証券会社で働いていました。4年半は

ど働いたのですが、ノルマが厳しく、転職をしました。現在は損害保険会社で代理店を担当しています。

松尾 姫路で予備校チェーンを経営しています。具体的に言うと、全国に800店舗ある大手衛星予備校のフランチャイズの加盟校です。現在は姫路を中心に、大阪方面で校舎を展開しています。特に関西学院の入試課とのつながりがあり、先週も入試課の方に来ていただき、入試説明会をしていただきました。

私は86年入学で、特に受験が厳しい時代に入学したので、藤井先生が担当だった人文演習の40名のうち現役は3名のみで、残りは浪人生でした。男子学生しかおらず、女子は経済学部にはいないんだなあと感じたのが印象的でした。現在は姫路・大阪で予備校を経営しています。それ以外では関西学院同窓会の姫路支部の幹事をしています。同窓会支部としては5本の指に入る大きなものです。来月に総会があるので、その準備で忙しくしています。本日はどうぞよろしく願います。

磯井 2005年に経済学部を卒業しました。その後、食品の卸売事業をしている会社に入社しました。ずっと大阪で働いていましたが、今年の6月から東京に転勤になりました。商品開発に携わる部署で営業として働いています。宜しくお願いいたします。

【在学中の学びと大学生活】

小林 学生時代の活動、ゼミにおける学び、課

外活動など、当時力をいれていたことについてのエピソードをお聞かせください。

細川 田中先生のゼミでは勉強はもちろんのこと、ビール工場へ見学に行ったり、京都大学の古川ゼミとディベートをしたりと、多様な活動を展開していました。勉強だけではなく、社会に出て通用する様々な力もつけたかったため、そのようなイベントを非常に楽しみにして、色々な準備をしていた思い出があります。授業だけではなく、ゼミを中心とした活動の準備のプロセスを経験することができ、そのことは現在の仕事でも役に立っていると思います。

小林 田中先生からみて当時の細川さんほどのような学生でしたか？逆に細川さんから見た田中先生、田中ゼミはどのような印象でしたか？

田中 ゼミの中で一番良く勉強する学生でした。しかし典型的な「優等生」らしくはなく、いたずらっ子っぽいところがありました。一番印象的だったのは、広報室が田中ゼミの研究発表の様子を取材にくる機会があったときのことです。パワーポイントなどマイナーな時代だったので、みんなが資料を見つめていると非常に地味な写真になってしまふ。そこで、彼は模造紙を持ってきて、発表の内容をカラフルに書いて、黒板にはった。日ごろのゼミの様子とは少し異なるが、何を求められているのかを、自分で考えてすることができます、遊び心のある学生だったと思います。当時の学年のゼミは積極的な学生が多かったので、その中でも目立っていたということ、かなり積極的だったのだと思います。

細川 田中ゼミは、今も昔も愛されているタナアツゼミでした。

田中 以前エコノフォーラムで、将来の夢は、「威厳のある先生」と書いたことがありますね（笑）。

中筋 大学時代のことを色々振り返ってみましたが、どのような勉強をしたかは、正直なところ、詳細には覚えていません。学校にいったら友達に会えるので、いわば集合場所として使っていて、その後アルバイトに行ったり、ゼミやその他の友達と食事に行ったり遊びにいたり、という学生生活でした。勿論、先生に言われたことは、最低限やっていました。しかし、そんなに勉強をしつかりやったという記憶もなく、楽しい4年間を過ごしたなという記憶しかないです（笑）。

小林 かなり謙遜気味に言われているようですが、平山先生から見られていかがでしたか？

平山 彼女はゼミの第一期生で、明るくて楽しい子で、ムードメーカーでした。ゼミ長と仲が良く、掛け合い漫才のように、楽しく盛り上げてくれていました。その年にディベート大会が始まり、ゼミではそれをやるのが手一杯でしたが、幸い一期生には80〜90名の応募があり、元気のある学生が集まりました。その中で、引張り役の一人、いや、突っ込み役かもしれません（笑）として活躍してくれました。

小林 中筋さんから見た平山先生はどのような印象でしたか？

中筋 先生にたいして怖いと思うことはなく、人のいいおじさんという感じでした。

平山 一期生のゼミ生に「先生、威厳をもってください！」といわれたことがありますよ。私はそういう人間ではないと回答しましたけどね（笑）。

村田 当時から平山先生は、ゼミで駄洒落ばかり言っていましたか？

中筋 すごく言っていました。すべて、しーんとなっていました（笑）。

松尾 86年に入学をしましたが、当時はバブル全盛期で、卒業時にはバブルが崩壊していました。そのため、現在とは雰囲気違ったように思います。将来何をしたらいいのか、在中ずっと考え続けてきました。親が会社の経営をしていたこともあり、2年生のときに親の勧めもあり、小さな塾を起業しました。塾をやりながら大学に通っていたため、親には、「アルバイトとして塾をやっているのではなくて、アルバイトとして大学生をやっているね」と言われました。どちらが本職なのかわからないくらい、大学に行くことができない時期もありました。その一方で、当時は就職先がたくさんあり、何もなくても求人があるほどでした。そのため、サラリーマンになることを考えたこともありましたが、その時に藤井先生から「松尾くんは組織の歯車になれない」とズバッと言われました（笑）。また、そのとき経営コンサルタントになりたいという夢も持っていました。藤井先生から「君には会社を経営することしかできない」と言われました。そのように厳しくもあたたかいエールをおくっていただき、現在に至っています。

ます。そのような学生時代でした。

藤井 率直に言うと、松尾君と勉強の話をした記憶はあまりありません。色々なタイプの学生がいて、大まかには、自分をもっているしつかり型、ふらふら型の両極にわけることができるのですが、彼はしつかりした自分のペースを持ったタイプでした。ただ、やんちゃなところもあって、世の中に出たら活躍するのだろうけども、私からは教員として彼に学生としてやらなければいけないことを指導していけばよいと考え、色々話をした記憶があります。彼のことを、そんなに心配はしていなかったです。

むしろ彼が卒業をしてから、色々話をする機会があったのですが、学生時代にそんなことを考えていたのかと、話を聞いてとても感心しました。たくさん学生を見ていくなかで、出来ることをどんどんぶつけていたら学生はそれに対して返してくれると実感しています。松尾くんの場合は拳骨を振り上げて、厳しく言うのがよいと考えて、敢えてそうしていました。**松尾** 確かに、私は先生に頻繁に怒鳴られていました。当時の先生はとも若かったですし、大学の先生というよりも、体育会系の先輩という感覚でした。ばりばり体育会系、男子校のノリで、バラエティ豊かなメンバーのゼミでした。藤井先生は、先頭にたつてお酒をのまれていました(笑)。

磯井 大学に入ってから、時間とお金を自由に使えるようになったので、いかにそれらをも有効に使うかと4年間考えていました。大学での勉強や教職の資格取得にむけた勉強をする

とともに、旅行が好きだったので、アルバイトでお金を稼いで旅行の計画を立てたりしていました。そのため、スケジュール帳はびっしりうまる状態で、アルバイトも3つくらい掛け持ちし、充実した4年間でした。

就職活動でも、自分の目で見て沢山の企業をまわり、最終的に2社に絞りました。総合職と一般職で迷ったのですが、村田先生に「総合職でがんばって欲しい」とエールをいただき、現在の総合職に決定しました。今の会社では色々自由にやらせてもらえることもあり、時間の組み立てなど、大学時代の経験が生かされているように思います。学業の記憶はあまり無いのですが(笑)、村田先生のゼミでは頑張つてやっていたと思います。

村田 ゼミが始まった当時は、まじめでおとなしい学生という印象でした。月日が経つにつれ、色々なことを積極的にやってくれ、とても活発なイメージになりました。それもあって、総合職をすすめたのだと思います。実際に彼女は就職が決まったあと、SR(※注・キャリアセンターが主催の、先輩が後輩の就職支援をする制度)をしていました。そして、是非ともゼミでSRの活動をさせて欲しいと自ら申し出てくれました。それがきっかけで、村田ゼミでは4年生から3年生への就職支援が現在も続いています。就職活動サイトの記事の人気投票でも彼女の活動が選ばれていました。彼女は、はじめの印象とその後の印象が大きく変わったゼミ生の一人です。

小林 磯井さんから見た村田先生はどうでした

か？

磯井 怖くはなかったですが、威厳はありました。しめるところはしめて、鉛と鞭の指導でした。当時のゼミは、おとなしかった印象があります。私はゼミにたいして、仲間意識やイベントを求めていたので、それまでは参加する側だったが、企画する側になっていきました。

【大学生生活の学びと今の仕事の結びつき】

■見識を広める「資格」「日経新聞」「世代間交流」

小林 当時の学びが今の生活、仕事にどのように生かされているか、お聞かせください。直接的に生かされていることは少ないかもしれませんが、間接的なところでも構いません。私は社会学部出身で、ずっとマスコミを目指していましたが、現在の仕事でも当時の学びは間接的に役に立っているなど感じています。学生時代の生活・学びが、現在皆様に与えている影響について、お話しただければと思います。

細川 田中ゼミに入ってから数ヶ月後の大学2年生のときに、人の勧めでファイナンシャルプランナーの資格を取りました。資格を取得したのは、1999年の10月なので11年になります。当時はそんなにメジャーな資格では無かったのですが、ゼミ生の中に税理士を目指す者が多く、就職氷河期だったこともあり、取得しておけば何か役に立つかもしれないと、やや受身で勉強をして取得した資格でした。

実は今日も午前中に、住宅のモデルルームで

不動産の購入を検討している人の相談業務の仕事をしてきたのですが、まさにその資格を使って仕事をしてきました。直接的にはそのような形で当時の学びが役に立っています。間接的には、お酒が強くなったことでしょうか（笑）。お酒の限界は学生時代に知っておいたほうがいいですからね。

田中 彼が在学中にそんな資格を取得していることについては、知りませんでした。勉強は各々で自主的にして、ゼミでは営業などで役に立つお酒の飲み方を指導していたんですよ（笑）。でも、彼は卒論でリスク性商品の話をしていたので、繋がっていますね。

細川 当時証券アナリストの資格の勉強もしていたので、卒論の役に立ちました。優秀論文賞にも選んで頂きました。

中筋 平山先生から日経新聞を読むように言われていたことは、役に立ちました。詳細に読んでいたわけではなかったのですが、最初に就職をした会社が証券会社で、日経新聞に今朝掲載されたことに反応して毎日株価が変動するので、日経新聞を隔々まで読んで、株価の変化に注目する必要があると。会社に入る前から平山先生にそのように指導をして頂いていたため、新聞のどのページにどのような情報が掲載されているのか「勘所」を掴んでいたの、役に立ちました。

また、ある時、選挙の世論調査のアルバイトをしたことがありましたが、証券会社に入社後、その会社の株価が上がりました。その株価がITバブルや業務内容などの理由から上昇したこ

とを、実体験で理解することができたので、非常におもしろいなあと実感しました。現在働いている損保の会社では、お客様や代理店からどんな保険に入ったらいいかアドバイスを求められる機会が多くあります。学生時代に色々なアルバイトを経験していたことから、多様な角度からリスクを考えて、保険を紹介することができています。これらが、学生時代の経験が現在でも生かされている点です。

小林 当時も今も、平山ゼミでは日経新聞を読むことを奨励されている、その成果ですね。最近「日経TEST」の団体賞ゼミ部門で、全国3位に入賞されていましたね。

田中 奨励ではなくて強制ですね（笑）。

小林 日経新聞が必読である感覚は、私も前職は証券会社系のシンクタンクで働いていたのでわかります。例えば、顧客との会話の中で「今朝の新聞で…」といった会話が出ると、主語がなくても、基本的には日経新聞を指している場合が多いですし、会社の独身寮に入寮すると、初日から日経新聞が各自のポストに入っていて、購読料が給料から天引きされている（笑）。日経新聞を読むことは、社会に出るための基本なのかなあと、思います。

平山 中筋さんはとても活発で、歯医者さんでのアルバイト等、色々なことをしていましたね。当時も今も、学生さんに対して一番言うのは、大人とつきあって下さい、ということですよ。友達同士だと、「ため口」での会話が基本で、尊敬語と謙譲語の使い分けができなかったり、敬語を使えるようにならない。広い意味でアルバ

イトをすることも、経験が増えるという意味ではよいと思います。ただ、アルバイトをするだけでが学生生活ではないですよ。私はよく遊び、よく学べと言っています。指導したことが間接的に役に立っていると信じています。

■世の中の動向を見抜き、行動に移す素養を作る経済学

松尾 仕事柄高校生から、経済学部と商学部、経営学部の違いや、経済学がどのように役に立つのかなど、よく相談をうけます。そうした時に自らを省みて思うのは、会社の経営をしていると、世の中の動きを知らないと、経営は成り立ちません。そういった経営上の判断を求められる時に、経済学の教養があるために、世の中の動きがわかり、つかむことが出来ているのだと思います。会社を経営していて、次にどのような作戦を練っていくかと考える時に、世の中の流れや現在の状況を知っていないと手を打つことができないので、そのような場面で、色々な意味で経済学の素養が確実に役に立っていると思います。

また、私個人としては、経済学の勉強よりもキリスト教の勉強が特に重要な科目でした（笑）。また、藤井先生は「経済史はまったく意味がないことはないと思う人もいるかもしれないが、歴史的センスを身につけることができる」とおっしゃっていました。会社の経営をしていく上で、今になって色々な意味で自分に染み付いたものの見方で、過去を振り返り、戦略を練り直すという作業を行う上で、歴史的な考察が欠かせな

いと実感しています。それが藤井ゼミに入ってよかつたなと思うことです。

磯井 経済学部がゼミ活動力を入れている点は、社会に出てからも良い経験だったなと思います。ディベート大会やソフトボール大会などは、他の人から教えてもらうわけではなく、自分たちで自主的に集まって、考えて、準備を進めていくという作業でした。現在の会社も全部を教えてもらえるわけではなく、自分で考えながら仕事の進めていくという仕事のやり方をしているのです、そのような自主的な行動をゼミ活動で身につけることができて役に立っていると思います。

村田 ディベートなどのゼミ活動において、勝ったり負けたりは意識をしていなくて、調べて考えるプロセスを大切にしています。考える過程の指導はしますが、その他は一切手を出すことはしていません。悪く言えば、ほったらかしです。当時も現在もそのような方針です。

【在学生へのメッセージ】

■ビジネス上の必須言語としての英語

小林 皆さん現在忙しい毎日をお過ごしだと思いますが、学生時代にやっておいたほうが良いこと、あるいは、ご自身を振り返って、もしやり残したことがございましたらお聞かせください。

細川 やりたいことは殆どやった気がします。大変充実した学生生活を過ごさせていただきました。

した。強いと言えば、大学4年生のときに授業も少なくなつて時間的な余裕があつたので、その時期をアルバイトに費やすのもよかつたのですが、海外旅行にいつておけばよかつたなと思います。国内はよくバイクで行つていたので、当時海外には本当に行つたことがありませんでした。語学力の向上につながつていたかも知れないですし、まとまった時間があるときに、海外旅行に行つておけばよかつたなと思います。

中筋 充実した楽しい4年間でした。あんまり詰め込みすぎるとよくないと思いますが、楽天などのケースに象徴されるように、日本の企業の中でも英語の公用化が進んでいますので、英語が話せるようになっておけばよかつたなと思います。現在の仕事で求められているわけではないのですが、英語が話せることで、できる仕事の範囲が広がるとあります。海外の部署で仕事をするチャンスもありますが、そのためには英語が必須条件です。

平山 英語の勉強をしたと思うが、必要性がないとなかなかしないですね。よく日経新聞に出ているように、国内の企業が海外進出に進出する中で、英語の必要性が増しています。

松尾 私も同感で、英語が話せるようになっていたらなと思います。学生時代にアメリカへ旅行に行つたことがあり、英語を話したいと思つてはいましたが途中で挫折しました。私の塾の高校生にも、とにかく大学の4年間で英語がしゃべれるようになれと指導をしています。これからの時代、英語を話すことができないとハ

ンデイになるのではないかと思います。
磯井 私の会社でも、国内を中心としたビジネスから海外展開を積極化する流れになってきており、新入社員の採用でも、英語に関わらず中国語、フランス語などに長けた学生を積極的に採用しています。私の現在の仕事には直接関係はないですが、今後社会に出ていく学生のみならずにはぜひ必要な能力だと思っています。

あとは、幅広い人脈を作つておくことは、後々とても財産になります。特に大学時代にサークルや部活に入つておらず、学生生活の最後にSRの活動をさせていたのだのですが、そこで仲間とは卒業をしてからも年に数回集まっています。他業種の方と話をするよい機会になり、非常に刺激になっているので、そのような仲間は大切だなあとあります。人とのつながりをつくれる場所に、大学時代からもっと積極的に参加しておけばよかつたと思います。

田中 今年のゼミ旅行で東証、日銀、銀行の3つの場所に行き、見学をさせていただいた後、話を聞かせていただきました。話をしていたいた3人全員が、英語が必要といっていました。日本と海外ではなくて、日本にいても英語が必要になる、そういう時代がきていると。英語ができないと会議に参加ができないとおっしゃっていました。

村田 英語の必要性に関連して言えば、経済学部では1年生からTOEICなど課しています。しかし、やはり必要性を実感しないと勉強をしないのも事実です。私のゼミでは、英語をもっと勉強をさせるために、就職が決まっ

ら、英語の教科書を使って授業をしています。4年生になると就職先が決まり、大学の授業に関心がなくなってしまう。マクロ経済学の英語で書かれた教科書には関心を持つてくれている。まず読むことから始めていますが、何かいい方法があればと考えています。

田中 2000年代前半は就職がそんなに悪い時期ではなかった。しかし今の学生さんは、リーマンショックで就職状況が悪い状態になり、次の年度になったからといって良くなる見込みもない。ハングリー精神がないという面もありますが、一方で将来に対するリスクが大きすぎて萎縮しているところがあるように思います。そうしたりすと対峙する一つの回答としても、英語はあると思います。

■関学経済の「丁寧さ・温かみ」と、求められる「ハングリー精神」の涵養

藤井 松尾君の口から英語を話せるようにならなければいけないと聞き、非常にびっくりしました(笑)。平山先生がおっしゃるように、必要性がないと勉強をしようと思わない。そのような点で、経済学部は非常に居心地がいいので、学生が満たされてしまっている所があるように思います。経済学部は丁寧に親切で手厚くて良いという意見を聞いたことがあります。その反面、学生は満たされていてハングリーでない。なので、僕は放っておいて、ハングリーな状態を作ることで、英語の勉強もするようになるのではないかと思います。温かみのある良いところプラス、いかにハングリーな状態をつくるかが、これからの経済学部の課題かもしれない

すね。

卒業生を見ると、社会人になってからいいことを言う学生が多くて、見直すことがよくあります。もしかしたら、放っておいても彼らはしっかりすることができると、もつといじめでもよかったかもしれないね(笑)。

小林 関学に着任をして、関学経済学部の丁寧な教育に驚いたのを覚えています。関学の「温かみ」が下地となって、社会に出てからいいことを言う存在になっていくのかもしれないですね。

平山 卒業生は、会社に入ってから鍛えられます。OB・OGと集まって話をした際に感じたのは、学生時代は非常に大人しかった学生が、積極的にほかのゼミ生に丁寧な連絡をしてくれ、非常に積極的に変わっていた。本人にそのことについて聞いてみると、「会社というところは、会議でどんどん発言をしないといけないとチャンスがない。黙っていたのはだめなんですよ」という答えが返ってきました。会社に入ってから鍛えられ、成長してくれていることがわかり、非常にうれしく思いました。逆にいえば、在中にもっと頑張つてほしかったですけどね(笑)。

藤井 松尾君がこんなに立派だとわかっていたら、もっと優しく接しておけばよかったなあ(笑)。そんなに心配しなくても、学生は成長していく能力をもっており大丈夫なのかもしれないね。丁寧なこと大切だけれども、学生の力を信じて、かまわないことも大切かもしれない。反省しています。

【真の「社会人基礎力」とは何か】

■必要条件としての「協調性」と十分条件としての「個の強さ」

村田 色々なデータを見ると、サークルや部活等を含め、大人との関わりがどれだけできるかによって、就職率が変わってくるそうです。そのことから、教員が学生に対してどれだけ密接に関わっていくかが大きいと思います。ただし、手取り足取りはよくないですけどね。

藤井 私のゼミでは、教員と学生という関係もさることながら、学生同士の関わりを大切にしています。小さな社会かもしれないが、ゼミの中でリーダーシップを発揮したり、みんなで見聞を分かちあったり、資料を集めたりという作業が、企業に行つたときの面接でも役にたっているのではないかと思います。

村田 ゼミの活動、例えばディベートや研究発表の準備でも、集団面接等に対する訓練が自然にできていると思います。

藤井 企業の集団面接でも関学の学生は協調性の面で優れているそうです。但しそれだけではだめで、関学は個人の強さをもっと伸ばしていく必要がありますね。中筋さんは私が基礎演習を担当したので、1年生から非常に元気だったので覚えていますが、こういう学生さんに自分たちで活躍してもらったら大丈夫だと思います。

中筋 私は現在の会社で9年目になり、4月には採用の面接をさせていただく機会がありました。その際に聞くことは、学生時代に力をいれ

たこと、自分の強みについてです。多くの学生は学祭やゼミやアルバイトにおいて、皆で協力をして、一つのことを作り上げて頑張ってきたことの話をします。しかし、そのことは当然大切なことなのですが、採用側としては個人の強み、どのようなことができるのかを見て、秀でた学生を採用したいと考えています。そういう学生は他の会社からも欲しいといわれていることが多いので、会社としても必死です。

小林 集団で協力・協調をして作業をすることは必要ですが、個人としての強みをいかに大学時代に身につけていくかということが課題ですね。

■求められる「考察力」「気付く力」

村田 どういう強みを持った学生を企業は欲しいと思っているのか、そのためにはどうしたらいいのか、ヒントを教えてくださいませんか。

松尾 社員を採用する上で、欲しい資質の1点目は、ハングリー精神です。最近では、すぐに泣き言を言ったり、待遇面を重視していたり、ちょっと合わなかったらやめる子が多い。我々としては、そんな人は要らないです。

2点目は、考察能力・思考能力です。すぐに人に教えてもらおうとしたり、マニュアルをみたりする人が多いが、もっと自分の頭で考えなければいけない。特に上に立って大きな仕事をしていく人間であればなおさら、自分の頭で判断をしていかなければいけません。その2点を、学生時代に鍛えていく方法があればと思います。

す。

村田 中国やインドの学生は本当にハングリー精神を持っているが、日本の場合は経済的に豊かで、ハングリー精神といわれても、今一つピンと来ないと思います。もう少しわかりやすくハングリー精神について、お話しいただけますか。

松尾 経済的には満たされた今、ハングリー精神の源泉はおそらく、自らの仕事に対する使命感、モチベーションの上げ方なのではないかと思えます。きつかけとして、勉強と同時に、色々な人の話を聞かせたりすると非常によいと思えます。

細川 私は「気付く」力が求められているのだと思います。周囲をよく見て、自分で課題をつくり、解決をする。言われたことをやるのではなくて、自分で見聞きした情報の中で、出来ることをする。それによって自分か役に立っているということを感じる。それも自分で検証をする。「自分で課題設定をする力」が大切だと思うので、学生時代に意識してやっておいたほうがいいと思います。田中先生の卒論の設定の方法も同じでしたね。現在も意識してやっているつもりです。

田中 いいこと言うね(笑)。

磯井 いまの学生は、社会のきめられた枠にはまっている人、自分で考える力がない人が多いように思います。社会にでるとルールはひかれていないので、自分で考えて行動をする力を学生のときに身につけておいて欲しいと思います。

今年、同じ部署に新採用者が入ってきたのですが、社会的な常識がなくて非常に残念でした。営業で同行をした際に、地下鉄で彼は一人で端の座席に座って寝ていました。そのような姿勢に驚き、非常にがっかりしました。もっと積極的に先輩の話を聞き、そうした中で少しでも早く仕事のスキル・ノウハウを高めることに努める等、モチベーションの高い学生が社会に出てきて欲しいと思います。

先輩としては厳しく指導したいのですが、最近はずいぶんやめてしまったりするので、難しい部分もあります。女の子は強く、男の子は弱い印象があります。草食系ですかね。

■他者への「サービスピ精神」の重要性

村田 有馬温泉で毎年ゼミ合宿をしています。が、近年は最初から男の子と女の子にわかれてしまい、男の子が女の子の輪の中に入っていない。男の子があまりに弱いので、2時間お説教をしましたよ(笑)。それから少し変わりましたが…。

藤井 デイベートの後など、他ゼミとの交流機会の際の打ち上げのときに、自分のゼミのメンバーで固まって、他のゼミと交流をしないところがありますね。社交性というよりも、日本人特有のところがありますが、以前よりもその傾向が顕著になったように思います。

田中 全くできないのではなくて、あとちょっとできないように思います。私のゼミでは、社会人を入れて飲み会をすると、社会人の人たちは交流がうまくできているので、それに引つ

張られてしまうようになります。しかし、学生同士で他のゼミと合同の場合は、どうしてもゼミとゼミが分かれてしまいますね。

小林 輪を崩して入って行って、そこで話題を提供する力、人に対するサービス精神は、ある意味では仕事の上でのイニシアチブを取っていくスタンスとも共通しますが、学生はその力が未発達な印象がありますね。

平山 特に日本は「気付き」が要請されている社会ですが、小中高で受身であることに慣れてしまっているため、大学生は受身です。働くこととはどういうことかという質問をしても、してもらうことに視点が向きがちで、自分に何ができるのかという視点が希薄です。

仕事では、上司、同僚、お客さんを喜ばせていかなければいけない。社会は人を喜ばせることによって、自分の評価が上がっていく、認められるということが、人間の一番基本的なことです。しかし最近の学生は、やってもらうことばかり考えていて、自分でオファーする視点が欠けているのかなと思います。私自身もまめなことところがるので、自主的にさせなければいけないところを、つい口を出してしまうので、よくないなと思っています。

私のゼミでは新書の書評をみんなに書いてもらっています。それに対して全員に、パソコンのメールでコメントをおくり、さらには携帯のメールに、コメントをパソコンのメールで送った旨の連絡をしています。それに対して、「受け取りました」とだけ返事をする学生がいます。しかし、返事をする学生はまだまして、返事を

しない学生も多くいます。私はゼミで「ここは日本なので、うそでもいいから「先生、お忙しい中ありがとうございます」と言いなさい」と言いました(笑)。

村田 以前にも平山先生から象徴的な話を聞いたことがあります。今の学生は資料を作成したら、まず教員に持ってきて、それから学生に配るということをしないと。私のゼミでもそうなのですが、私は自ら気付けてほしいという期待も込めて、そのことについて学生本人に言っています。

藤井 従来で考えれば常識的なことを、知らずに育っているということではないでしょうか。レジュメを最初に先生に見せるということにしても、全然そういう発想をもっていないように思います。以前はろくでもない学生が多かったが、先生が入ってきて話を始めたから、話をやめて黙った。しかし、現在の学生は私が話をはじめてもごそごそ話をしたりして、失礼という感覚がない。接し方のルールを知らないままに大人になってきているという気がします。だから、私たちは学生と接していく中で、全てを教えてもいけないし、ほったらかしにするわけにもいかない。ものすごくジレンマを感じます。実は企業でも同様の悩みを抱えているのかもしれない。

細川 「やってもらう経験」と「自分のためにやる経験」はたくさんしている半面、「やっただげる経験」を十分に積んできている学生さんは少ないように思います。やっってもらう経験しかしていない人材は、社会にでてからも少しも

ありがたいと思われたい。ですから、大学でそんな「やっただげる経験」ができるようなプログラムはできないでしょうか。

私でいえば、大学4年生の時のSRがそれにあたるのですが、それが唯一の「やっただげる経験」だっと思います。あとは、大学時代はお客様としてやっってもらったか、自分のために何かをしたことしか、私はあまり覚えていません。やっただげる経験ができるカリキュラムがあったほうがいいように思います。

平山 人のために何かをすることを楽しんで、そこから多くのことを学ぶチャンスと前向きにとらえたらいいのに、人のために働くことは損だと思っている学生がいるので困ってしまいます。ギブ&テイクなんだけれども、相手のテイクに応じてギブしようという都合の良さがある。自分からテイクをすれば、自然と相手からギブされる。自分から与えていけないといけいと指導をしています。

小林 学生にエントリーシートの添削を頼まれることがあるのですが、この企業では自分を高めることができるという視点が多く、自分がここでどのように貢献できるかという視点が少ないものが多いのが現実です。多分それは、人に対して何を貢献できるかということを考えるきっかけがなかったため、エントリーシートにも現れているのかなと思います。

田中 ゼミのOBから話があったのですが、会社に対して興味があるという程度では採用はしてもらえない。興味があるというのは、やはり自分を中心の意識の現れに過ぎず、「その会社

で働く覚悟がある」という意識にまでもつていかなければ就職できないということですね。

細川 覚悟がある人間のほうが、成績もあげてきますもんね。そして、他人のためにやっている人のほうが、数字もあげている気がします。

小林 それは間違いですね。数字は正直です(笑)。

中筋 気持ちの世界のことなので、変えるのはすごく大変だと思います。ただ、人間は痛い目にあったら、それを変えようと考えるので、その時がチャンスだと思います。仕事をしていても、自分が楽になるために、自分が痛い目に合わないためにどうやって仕事をしていったらいいのかを考えていくと、それが結局、会社や上司やお客様にとっての利益にもつながるのではないかと思います。

今の「ゆとりの世代」と言われる人たちと仕事をしていく中で、先輩からこんな風によったらどうかとアドバイスをして、なかなか聞いてくれない。しかし、そうしていると必ず痛い目にあっている。その時にチャンスと思って、こんな風によっていたらどうかと指導したら、結構変わってくれることが多いように思います。働いてからでも変わることはよくあるので、より若い大学時代にもそういう痛い目に会う機会が数回でもあれば、考え方を変えたり、行動を変えたりする機会になったのではないかと思います。関学はとても居心地のいいところだったので、どうやって痛い目にあわせたらいいのかが難しいところですよ。

小林 本日のOB/OGの皆さんのお話、先生

方のお話から、大学生が社会に出る上で必要な力に関する重要な示唆を頂きました。それと同時に、学生を育てる立場にある我々経済学部の教育の在り方に対するヒントも頂いたような気がします。予定の時間も少々過ぎてしまいましたので、そろそろ終わりにしたいと思います。貴重な週末に、長時間にわたりご議論いただき、本当にありがとうございました。

【対談を終えて】

関学経済学部を巣立ち、様々な業界で活躍するOB/OGの話は多方面に及び、色々な角度から、自らの大学時代の経験や、今後社会に巣立つ大学生に対する期待の言葉が寄せられた。対談からもわかるように、OB/OG達は、決して「ガリ勉」タイプではない。勉強やゼミ活動にも熱心に取り組みつつ、一方で課外活動、アルバイト等、様々な経験を通じて、充実した大学生活を送って来た様子がうかがえた。その結果として、社会に出て求められる基礎的能力を獲得していったと思われる。

4名の話の中で異口同音に指摘されている、社会人として求められる資質は、「自ら課題を発見し、その主体的な解決を通じて他者や社会に貢献する力」であったように思われる。それは一朝一夕に獲得できるものではなく、主体的な学習姿勢、ゼミ活動などを通じた共同作業におけるイニシアチブの発揮、そして、多様な経験や異なる世代との交流などを通じて、徐々に形成されていくものなのかもしれない。

OBの発言の中にもあった通り、経済学を学ぶことは、世の中の流れを的確につかみ、大局的に判断し、自らの意志決定に反映する、そうした思考力の獲得につながる。同時に、意志を行動に移し、それを完遂するためには、英語力や各種の資格等のスキルは勿論のこと、他者から学び、協働するばかりではなく、他者に奉仕する力、求められることに気付く能力も求められる。それには、他者との協調性とともに「個」としての強さが求められる。大学という場で、そうした「優しく・たくましい」能力を如何に育んでいくか。このことは、経済学部における今後の教育に課された一つの宿題なのかもしれない。

現役・将来の経済学部生諸君。社会が皆さんに求める資質は贅沢である。だからこそ、これからは「書も持とう、町へも出よう」ではありませんか。

(文責：小林)

2010年
5月24日
月曜日

小林伸生 教授（産業構造論）

集積のメリットとデメリット

私は地域産業集積の研究をしています。研究を始めた頃から抱く疑問であり、未だに完全にはわからない点として、「企業や産業は、何故集積するのか」そして「何故ある都市は発展し、他の都市は衰退するのか」というテーマがあります。集積は様々な力学の結果として生み出され、また新たな価値を生み出す力となります。例えば東大阪市の町工場

の力で打ち上げられた「まいど一号」は、地域に密集した企業の技術やノウハウ・英知を結集した成果です。また、大都市から最先端の文化・新しいビジネスが生まれる機会が多いのも、そうした都市のもたらすメリットといえます。

同時に、満員電車に揺られての長時間通勤・通学は、私たちにとって苦痛であり、出来れば避けたいものです。また大都市部の高い不動産価

格に象徴されるように、集積はその地における事業機会の多さや、土地・オフィス等に対する旺盛な需要を反映して、各種のコストを押し上げる要因になります。このように集積には、メリットとデメリットの両方が存在するのです。

集積のメリットは、大きく分けて2つあげられます。すなわち、①多くの人・モノ・情報の集中による各種の取引コストの低下、②多様・異質な主体が相互触発することによる新たな付加価値の創出です。都市で新たなものが生まれる頻度が高いのは、そこにある相互触発が重要な役割を果たしているためです。つまり、多くの異質な人・情報が交錯することにより、いわゆる「新結合」が生まれ、新たなビジネスや文化が発生し、その中のいくつかが、次世代のトレンドを作っていくのです。

一方、集積が定常化・安定化すると、そこにはロック・イン（固定化）効果が生じ、中長期的に見れば、多くの場合衰退をもたらす方向に作用します。構成員間の関係性が固定化した地域において衰退傾向が顕著に見られるのは、「よそ者」の考えを排除し続けてきたことに、大きな原因の一つがあると考えられます。

こうした現象は、都市・地域にとどまらず、それらを構成する私たち人間関係にも当てはまります。気の合う仲間と過ごす時間は楽しく、快適なものですが、それが過度に安定化・固定化すると、新たな触発が生まれなくなり、その構成メンバーにおける進歩が止まってしまいます。そうしたことが、全体としてその共同体の衰退を招くことになるのです。

人間関係においても集積のメリッ

トを最大限享受していくためには、過度の「仲良しクラブ」を避け、常に「よそ者」の考えに耳を傾け、新たなアイデアを取り入れていく姿勢が必要です。違った考えに耳を傾け、自分の考えを表明する。その中から新たな関係性を構築し、アイデアを生み出していく。そうしたことが自分の発展にも、仲間の発展にもつながっていくのです。

大学という場所は、高校までよりもはるかに多種多様な人が集まっている場です。それはある意味リスクもありますが、自分が成長する大きなチャンスも与えてくれます。ゼミやクラブ・サークルなどの中で、それまであまり知らない人との意見・考えの交換を、今より少しだけ積極的に行うことで、これまで得られなかった視点や考えが得られるかもしれません。

2010年
5月31日
月曜日

篠原 久 教授（社会思想史）

アダム・スミスの恩師と親友

アダム・スミスの恩師フランシス・ハチソンは、グラーズゴウ大学の「道徳哲学」講義において、哲学を「心の病に対する薬」とするよう学生たちに訴えていました。のちにスミスの親友となるデイヴィッド・ヒュームは、その処女作『人間本性論』を出版するに先立って原稿の一部をハチソンに送り意見を伺います。その回答に対してヒュームは次のように書き送ります。「あなたの評言で私が最も心を打たれましたのは、私の著作には徳性を支持する一定の熱意が欠けているのご意見です。」「しかしながら」身体の考察の場合と同様に精神の考察には、二つの異なったやり方があります。一つは解剖学者としてのやり方で、もう一つは、画家としてのやり方です。これらの二つのやり方を結合することは不可能のように思われま

す。ヒュームは前者の（解剖・分析という）やり方を採用し、「実験的な推論法を精神の諸問題に導入する試み」という副題を自著に付すことになりました。

恩師ハチソンから「有徳（慈愛）の倫理学」を学んだスミスは、親友ハチソンのやり方の斬新さにも惹かれつつ、「自己」の処女作『道徳感情論』を次のように書き始めます。「人間がどんなに利己的なものと想定されるにしても、明らかに彼の本性のなかにはいくつかの原理があつて、それらは、彼に他の人々の運不運に関心をもたせ、彼らの幸福を、それを見るという快樂のほかには何も彼はそれから引き出さないので、彼にとって必要なものとするのである。この種類に属するのは、哀れみまたは同情であつて、それはわれわれが他の人々の悲惨を見たり、たいへん

生き生きと心に描いたりするとき、それに対して感じる情動である」。このハチソンの「哀れみや同情」に対してスミスが自己の倫理学の土台に据えようとしたのが、「同胞感情」としての「共感・同感」（シンパシー）であつて、彼はこの感情を「コミュニケーション原理」として徐々に分析・展開し、「同感（是認感情）獲得本能」、「信じられたいという欲求」、および「説得本能」というレベルにまで押し進め、次のように『国富論』の「交換性向」の基盤と接合いたします。

「人間は仲間の助力をほとんどつねに必要としており、しかもそれを彼らの慈悲心だけから期待しても無駄である。自分の利益になるように彼らの自愛心に働きかけ、自分が彼らに求めることを自分のためにしてくることが、彼ら自身の利益になる

ということを、彼らに示すほうが、有効だろう。他人に何らかの種類の交換を提案する者は誰でも、そうしようとするのである」。

こうして、スミスの道徳論は、画家の立場というより解剖学者の立場を採用することになり、『道徳感情論』の最初のフランス語訳も『魂の形而上学』というタイトルで出版されます。ところが『道徳感情論』の最終版では、「徳性の性格」（＝実践倫理学体系）という長文の新たな論考が付加され、「精神の解剖」に偏っていた著作を、多様な「性格の描写」という立場を導入することによってバランスの回復を目指します。解剖学者と画家（投薬治療）、これは理論と実践という対比につながり、経済学を含むスミスの学問体系の主要な特徴にもなっていくものです。

2010年
6月2日
水曜日

東アジアの自立

井口 泰 教授 (労働経済学)

欧州では、東西ドイツ統一後、20年前にソ連邦が崩壊し、米ソ両陣営の間の冷戦構造は崩壊しました。欧州連合は、経済統合であるだけでなく、不戦共同体でもあります。域内の国境はし確定し、同時に域内では移動の自由が保障されています。東西冷戦の最前線であったドイツからアメリカ軍とロシア軍は撤退しました。近年、NATO（北大西洋条約機構）とロシアの間でも、疑心暗鬼を解消し、協力する動きがあります。

アジアでは、1952年に朝鮮戦争は休戦となりました。しかし、朝鮮半島を東西に横切る線は、未だに停戦ラインであって、国境ではありません。アジア域内には、実に多くの諸国間で国境紛争が存在します。ご存じの日中や日韓、日露の間のみならず、中国と東南アジア諸国連合（アセアン）諸国の間さえ国境紛争が頻発しています。最近では、海洋資源をめぐる思惑から、中国と周辺

国の海軍どうしが砲火を交える事件が何度も起きています。中国や極東ロシアの軍事力が増強されるなかで、日韓両国には、依然、多数の米軍基地が維持存在します。

1997年7月にタイで発生した金融危機が、東アジア域内に急速に伝染し、域内の相互依存の意識が高まりました。当時、韓国の金大中大統領のイニシアチブから、「東アジア研究グループ（EASG）」が、東アジア統合のビジョンを描きました。そして、アセアンが日本、韓国及び中国と連携する形で、「アセアン+3」の経済統合の枠組が動きだしました。その首脳会議では、既に「東アジア共同体」（an East Asia community）の形成が、政治的な到達目標として合意されています。そのために必要な機能的協力の一つである自由貿易協定の締結が進み、2010年は、日中韓とアセアンの自由貿易協定が全て出揃う画期的な

年でした。

しかし、中国の突出した経済成長と急速な軍事力の近代化を背景に、「東アジア共同体」は、実は「大中華圏」だという見方が生じています。そこでは、中国は意図するしなにかかわらず、政治・経済的及び軍事的に東アジア地域を支配するといふのです。この見解が日本で影響力の大きい専門家から主張され、国内では「東アジア共同体」への熱意は急速に冷めてきました。

しかも、日本政府が、豪州やインドなどを加えた経済統合の枠組を主張するなか、中国政府は、これら諸国を加えた「東アジア・サミット」への関心を失いつつあります。韓国政府も、日本や中国との経済統合を優先せず、に、アメリカやEUと自由貿易協定を締結しました。これは、東アジアで日中間に埋没するのを回避しようとする行動とも解釈されます。

このように、東アジアでは、再びナショナリズムが高揚され、リジョナリズムが衰退し、国々相互の猜疑心が高まっています。これは1世紀半前から、欧米の植民地化のなかで分断されたアジア諸国が連帯し、相互信頼を培って不戦共同体を形成する理想とは逆行します。

本日の聖書の箇所（ルカによる福音書十二章四九―五三節）は内容が過激で、説教にもあまりとりあげられません。「わたしが来たのは、地上に火を投じるためである。……私が、平和をこの地上にもたらすために来たと思っているのか。……そうではない。むしろ分裂である」。私は、新約聖書学者の批判を覚悟で、イエスが私たちに投げ与えた火こそ、猜疑心の上に成り立つ冷戦構造すらも破壊する力であり、対等な立場で不戦共同体を希求する人々の強い意志なのだと思いたいと思います。

2010年
6月9日
水曜日

井上琢智 教授（経済学史）

Perfectability of [光]と[影]

これまで、この「経済と人間」シリーズでは、「経済人は男性か女性か」「経済学は自然をどうとらえたか？」など、経済学が前提にできた論点を取りあげてきました。今日は、経済学がときには前提としている人間の「自己完成可能性」について考えてみたいと思います。

ところで、関西学院の校章である「クレセント」もこの問題を扱っています。それによると、新月は「月が太陽の光を受けて自らを輝かせるように、われわれは神の輝きを常に受けて自らを輝かせ続ける者であるとの自覚と、新月がやがて満月へと完全を目指して輝ける存在であるように、ひたすら理想を憧れ求めて、進歩向上していくことを象徴するもの」とされています。

「人間は完全な存在になりうるか」という問題は、旧約創世記11章

の「バベルの塔」の話を持ち出すまでもなく、古くから人を悩ませてきた問題です。例えば、心と身体を区別したプラトンは、人間が完全な存在になるためには、肉体の制御と理性による心の制御が必要であると考えましたし、キリスト教では、原罪を犯してしまった人間は、神の恩寵による以外に、人間の完全化は不可能であると教えました。

しかし、近代以降は、理性が重視されることで、神や宗教がしだいに後退し、逆に世俗的徳徳の完成と教育の重要性が強調されるようになりました。例えば、ロックは白紙状態で生まれる人間は教育により知的・徳徳的完成が達成可能と考えました。ルソーは人間の完成能力が人間を自然状態から文明状態に移行させる一方、人間の不幸、知識と誤謬、悪徳と美徳の源泉であると考え、こ

の完全可能性の「光」と「影」を明らかにしました。

この点で近代の産物の一つである経済学は、人間は「極大・極小原理」を完全に実現できる「経済人」を前提に構築されています。もともと、経済学者・思想家、さらには文学者の中には、この「仮説」の妥当性について疑義をはさみ、今なお議論が続けられています。ただ、重要なことは、このような「仮説」には当然のことながら「画一性」が含まれているということです。この画一性のもつ問題点を明らかにした一人にフンボルト(K. W. von Humboldt, 1767-1835)がいます。彼はドイツの人文主義者でベルリン大学の生みの親であり、イギリスのユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの設立に大きな影響を与えましたが、「重大な指導原理は、人類が能う限り多種

多様な発展を遂げることが絶対的に根本的に必要である」とし、「自己完成可能」実現に至る「多種多様な発展」を主張しました。この文言をその著『自由論』の冒頭に掲げたJ・S・ミルは、この「多種多様な発展」を実現する手段として、人間の「個性と自由」を強調しました。この考えは、今日まさに人間がしばしば「人材」・「人的資本」と呼ばれ、人間に画一性が求められているという事実とは対極にあることとなります。本来「人間の学」であるはずの経済学は、もう一度、人間とは何か、経済人とは何かを再考する必要があるのではないのでしょうか。

2010年
6月14日
月曜日

寺本益英 教授（経済史）

日本茶の魅力と愉しみ方

裏打ちされた奥深さを感じました。

さて、日本の伝統文化を代表する
侘び茶の基礎は、15世紀後半、村田
珠光によって築かれました。珠光は
奈良の生まれで、のちに京都に出て
一休宗純に参禅し、茶禅一味の境地
に至ります。珠光の茶の神髄は「藁
屋に名馬をつなぎたるがよし」とい
う名言に表れています。侘びたるも
の（すなわち藁屋）に名馬という名
品を組み合わせ、思いがけない対比
で美を見出そうとしているのです。

その後、珠光が理想とした侘び茶
を完成させた茶人は武野紹鷗です。
紹鷗は、『新古今集』にある藤原定
家の有名な歌「見渡せば 花も紅葉
も なかりけり 浦の苫屋の 秋の
夕暮」のなかに、草庵の侘び茶の理
想を求めます。つまり、花や紅葉を
十分眺めつくしてはじめて、一切の
煩惱を離れた無一物の世界（すなわ

ち苫屋の寂びきった風景）が展開す
るといふわけです。日本独特の閑寂
な風趣、精神的奥深さが感じられま
すよね。

武野紹鷗の弟子である千利休は、
茶道をほぼ完成の域にまで高めた人
物です。茶室、道具、点前、懐石、
精神性など、茶の湯を構成する様々
な要素において創意工夫を重ね、今
日の茶道の原型を整えました。利休
の茶の精神は、「和敬清寂」の四文
字に凝縮されています。「和」は争
わないで仲良くすること、「敬」は
相手を尊敬する気持ちを持つこと、
「清」は心の中を清く保つこと、
「寂」は心を穏やかにすることで
す。私たちの日常生活の中でも実践
したいところです。

茶道には実に多彩な道具が用いら
れ、日本の美術工芸の発展に大きく
貢献してきました。特に桃山時代よ

り江戸時代前半において、茶陶とい
われる茶道用の陶器に、優れた作品
が次々と誕生します。楽長次郎を祖
とする楽焼、その流れをくんで登場
する本阿弥光悦の陶芸、さらに野々
村仁清や尾形光琳・乾山兄弟に代表
される京焼の華麗な世界も、茶人の
要請に応じて創造されたものです。
美術館の展示で彼らの茶陶を鑑賞
し、魅了されたご経験をお持ちの方
もたくさんいらっしゃるのではない
でしょうか。

歴史を専攻する私は、松平春嶽の
「楽しみは ちふみやほふみ ひもとき
て いにしへ人を 友とするととき
という歌にとても共感を覚えます。
多くの文献を読んで、魅力満載の喫
茶文化を築き上げてきた「いにしへ
人」の生き方、考え方にふれるのが、
私流の日本茶の愉しみ方です。

私は今から10年ほど前から、京都
府茶業会議所の支援を得て、茶の
フードシステム（生産―流通―消
費）に注目し、各段階の現状と課題
を整理し、茶業活性化の方策を示す
研究をしています。研究のきっかけ
は、食生活の洋風化・簡便化志向の
高まりにより、年々リーフ緑茶離れ
が進み、伝統的産地の宇治でさえ苦
境に陥っているのが、振興策を提案
してほしいという依頼を受けたこと
でした。宇治茶業の振興策を検討す
る過程で、私は喫茶史の数々の魅力
に引き込まれてゆきました。
大多数の人にとってお茶は「のど
の渴きを潤す飲料」に違いないで
しょう。しかし私は宇治茶の研究を
始めた当初から、単なる飲料とは思
いませんでした。明らかに他の飲料
にはない精神性・文化性を備えてお
り、深く調べれば調べるほど、歴史に

2010年
6月16日
水曜日

井上勝雄 教授（統計学・計量経済学）

「働く幸せ」

私たちは、生きるため、さらにより豊かな生活のため消費しますが、それを可能にする所得が要りませんが、所得を得るには、誰かが買ってくれるモノを生産します。つまり私たちは、社会が必要とする働きをしなければなりません。こんなことを入門的な一著に執筆中、大山泰弘著『働く幸せ』の仕事でいちばん大切なこと』に出会いました。

著者が経営する日本理化学工業株式会社は、チョークづくりに取り組んできた社員74人の会社で、社員の7割は知的障害者です。それは、ちよつとした同情心と「なりゆき」で、二人の15歳の知的障害者を雇ったのが始まりであった。

会社から遠くないところに養護学校があり、ある日突然、一人の先生が訪ねてこられ、「うちの生徒の就職をお願いしたい」というのです。

一九五〇年代半ばの当時、知的障害者には、何ら施策はなく、彼らは社会のアウトサイダーだった。大山氏は、「とんでもない、無理な相談です」と回答します。数日後、先生は再び会社に来られるが、再度、断ります。いよいよ三度目は、「就職とは申しません、せめて働く体験だけでも。あの子たちは、この先、施設に入り、一生、働くことを知らずに、この世を終わってしまいます」。

このとき、「働くのが当たり前なのに、それが出来ないのは可哀想だな」と、彼に同情心が生まれます。そこで、2週間程度ならと、就業体験を受け入れたのです。

実習も今日が最後と言うときに、作業チームの代表格の女性が「一生懸命にやってくれるのだから、雇ってあげて。私たちが面倒を見ます。これは、みんなの意見です」と言い

ます。「それなら」と言うことで、卒業と同時に二人を採用しました。大山氏は、ちゃんと護ってくれる施設があるのに、満員電車に乗って通勤し、工場で一日中働かせることに、どこか後ろめたさがあったようです。

あるとき、禅寺を訪れる機会があり、祈祷後に用意された食事の席で、寺の住職が隣に座られた。何か話かけようと、「うちの工場には知的障害者の人たちが働いています。が、どうして施設に居るより、工場に来たがるのでしょうか」と彼の口から飛び出した。唐突な問いかけに、ご住職は、「人間の究極の幸せは4つです。人に愛されること、人ほめられること、人の役に立つこと、そして人から必要とされること。障害者の人たちが企業で働きたいと願うのは、社会で必要とされるのを実

感すること、本当の幸せを求める人の証なのです。」と。

この後、大山氏は、働くことで人は幸せになるなら、会社は利益を出すとともに、社員に幸せを提供する場でなければと考え、あらたな商品開発とともに、健常者と障害者が同じ能率で仕事が出来よう、作業工程、生産方法など工程改革に全力を上げて取り組みます。そうして、知的障害者が主力の会社を作り上げたのです。

社会の誰かのために働き、所得を得る、これは「経済ルール」の一つです。そしてこの働くことが、本当の幸せに繋がっているのです。派遣切り、ワーキング・プア、雇用格差といった、およそ働く幸せのイメージとほど遠い最近ではあるが、大山氏の話から、今一度、働く幸せを考えてみるべきではないでしょうか。■

2010年
6月21日
月曜日

松本有一 教授（理論経済学・環境経済学）

経済成長は格差を解消してくれるのか

かつて一億総中流といわれた時代がありました。高度成長期から、1980年代はまだそのような意識は多くの国民にあったように思われます。いわゆるバブルの崩壊以降、状況は変わってきています。

格差問題に関してはすでに多くの研究が出ています。私のきょうのお話は、自分自身での調査によるのではなく、既存の研究に負うもので

最近読んだ本に『平等社会』（東洋経済新報社、2010年）というのがあります。英語からの翻訳ですが、著者の一人は大学で経済史を学び、のちの疫学を学んだと紹介にあり、また「格差と、健康の社会的決定因に関する国際的研究の発展を後押しする役割を果たし」た、ともあります。

本書で取り上げられている論点

は、格差と健康、信頼の程度、精神疾患、平均余命、乳幼児死亡率、肥満、子どもの学力、10代の妊娠、殺人、収監率、社会移動です。

本書が示している証拠からいくつかの事例を取り出してみましよう。他人を信頼できるかどうかでは、信頼できると答えた人の割合は、平等な社会ほど高く、格差がつのるほど信頼は低下する。格差の大きい社会ほど、より多くの人々が精神疾患を患っている。違法ドラッグの使用は、格差が大きい社会のほうがより一般的。格差の大きい国ほど成人の肥満度が高く、子どもの太りすぎの率が高い、などです。

私の基礎演習のクラスで「ルポ 貧困大国アメリカ」（岩波新書）を読んでいるのですが、貧困家庭の子どもは、安い価格で腹を満たせる、カロリーだけが低いジャンクフード

のような食事ばかりするため肥満になるという報告がされています。

紹介されている事例をこれ以上あげることはできませんが、格差が大きいほど殺人や収監率が高いということとは、犯罪が多いということ、貧困者だけの問題ではありません。富者にとっても好ましい状態ではないということなのです。

わが国では格差問題に関して、それを解消するには経済成長が必要だといわれます。格差の解消だけでなく、赤字財政での国債発行残高の累増から脱却するためにも、経済成長しなければならぬと、従来の政権でも、現政権でもいわれてきました。本当に経済成長すれば格差は解消され、赤字財政から脱却できるのでしょうか。

政府は2010年6月18日に「新成長戦略」を閣議決定しました。

2020年までの平均経済成長率は実質で2%、名目で3%を目指すといわれています。確かに、今後強化していくべき分野があり、それらに重点的な資源配分をすることは必要でしょう。その結果、経済成長が達成されたととしても、成長の成果がどのように分配されるのか、財政をつうじての所得再分配のあり方を含めて、見つけ直すことが大事だと思います。

格差に関していえば、仕事に対して正当な報酬が支払われているかという問題があります。社会にはさまざまな仕事があり、3Kと呼ばれる仕事は、社会の存続に必要であるのに、しかし、低い報酬しか支払われません。なぜでしょうか。（白波瀬佐和子『生き方の不平等―お互いさまの社会に向けて』岩波新書、2010年も参照）

2010年
6月23日
水曜日

平山健二郎 教授(金融論)

行動健康経済学

学です。

タバコが身体に悪いことはよく知られています。タバコを吸うという喫煙には2つの意思決定が関わっています。第一に、喫煙は「時間上の選択」と言えることです。タバコを吸う人は喫煙によってストレスが解消されるとか、気分が一新するという効用を評価します。しかし一方、長年の喫煙行動は将来の健康をむしろばみ、病氣を得て、将来大きな不都合に直面するかも知れない、ということもある程度知っています。愛煙家は現在の小さな効用と将来の大きな効用との間の選択問題に直面しており、合理的に考えれば禁煙すべきと分かっていますが、目の前の小さな効用を得ることを選んでしまっていると言えます。

第二に、喫煙は「リスクの下での選択」という側面もあります。タバコを吸えば将来、肺がんや気管支炎の発病リスクが高まりますが、それ

は確率的な現象であり、喫煙者がすべてこれらの病を得るわけではありません。しかしそのような病気のリスクが高まることは確実であり、リスクをどう評価し、選択するか、という問題が関わってきます。

前者の問題は「時間選好率」といういわば主観的な利子率のようなものと深い関係があります。今日100万円を誰かに貸し、1年後に120万円にして返してくれるなら満足だ、という人は時間選好率が20%です。この人にとって1年後の120万円は現在の100万円と等価値です。時間選好率の高い人ほど現在を好み、将来を軽視しています。そのような人は今日我慢すれば、遠い将来には健康な身体という便益を得られるのに、それを軽く見て、目前のタバコとかアルコールに手を出してしまうのです。禁煙やダイエットに失敗する人というのはまさにそのような人たちになります。

ところで行動健康経済学はそのような分析はしますが、どうすれば時間選好率を低くし、将来のために我慢が出来るようになるかは教えてくれません。もしそんなことが簡単にできるのであれば、世の中から肥満をなくすることができそうですが、世の中にはそんなに甘くありません。

後者のリスクの問題は人間の危険回避度と関わってきます。もちろん喫煙をする人は危険回避度が低く、健康被害のリスクを軽く見ています。アンケート調査や実験などによって禁煙出来ない人は危険回避度が低いことも分かってきました。ただし、ここでも行動健康経済学は危険回避度を上げるために人間は何が出来るとは教えてくれません。悪しからず、ご了承下さい。

2年前のこの「経済と人間」シリーズでは「行動健康経済学の誕生」と題して、新しく誕生した行動健康経済学を紹介しました。今日はその応用である「行動健康経済学」という分野について少しお話しさせて頂きます。ここに依田高典・後藤励・西村周三著『行動健康経済学』という本がありまして、この本で読んだことを簡単に紹介したいと思います。

伝統的な経済学では自分の利益になるのであれば、そのための費用を勘案して、つねに合理的に行動するのが人間だと想定されています。しかし実際には、健康のためには禁煙すべきだとか、食べ過ぎない方が良いことが分かっているのに、そうでない人も多いのではないのでしょうか？そのようなことを「人間的」な行動をありのままに見据えて経済行動を分析しようというのが行動健康経済学であり、さらに健康に関わる経済行動を分析するのが行動健康経済

2010年
6月28日
月曜日

桑原秀史 教授（経済政策）

中国の企業観について ——思想的思索——

日本は中国と、長いあいだ古典を共有した歴史をもっている。目の前にある現象だけに幻惑されて、文化や経済の興行きをさぐる努力を怠ってはいけなとおもう。今回は中国の企業観について平明に思索をした

い。

中国の近代産業は国有企業とともに産声をあげた。その素地は、すでに1661年成立の清王朝の文化的な深さに求められる。『康熙字典』や『四庫全書』にみられるように、康熙・雍正・乾隆三代は、今日の学芸や産業の基盤に資する多くの遺産を残している。時代は折しも欧州産業革命期、乾隆帝は英国使節団に対し中華思想で望み、列強は武力による開国要求をなす。1840年、第一次アヘン戦争によって侵略は本格化する。『原道救世訓』を著した洪秀全が太平天国の乱をおこす。天朝田

畝制度を公布、「三綱五常」を厳しく批判し、世界大同を目指す。この燎原の火のごとく広がり鎮庄をはかったのが曾國藩・李鴻章らである。

この清朝政府の官僚であった曾國藩・李鴻章らによって1860年代から始められた洋務運動は、国有企業の設立を目的達成の政策手段としたのである。一方で西洋科学の吸収を目指しつつ、他方で、曾國藩の『曾文正公全集』では桐城派を継承し、護教的な朱子学の立場をつらぬいている。わたしは北京大学で当全集を解説するうちに、中国の士大夫の教養の根幹である『詩経』のゆるぎない思想が、脈々と流れていることに感銘を受けた。政治運動に徹するときにも、「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」の姿勢であろうか。また李鴻章は直隸総督兼北洋大臣となり、25年間清の外交を担当する。中国の近

代工場を建設し、艦隊を編成、江南機器製造総局などを設立した。近代産業育成政策の契機を固めていく。

この動きに対し「中体」から改革をうながすものが康有為、梁啓超を主導者とする変法自強派である。康有為は前漢の今文学派の説を奉じ、「平等」・民権思想を孔子の理想としてとらえている。この「大同」の流れをくみ、光緒帝のとき政務に参画した譚嗣同は、『仁学』のなかで礼にもとづく自己抑制と他者への思いやりを、儒家道徳思想の中心に考えている。気持を同じくする龔自珍は『己亥雜詩』のなかで、鋭敏な感覚で大変革の到来をうたっている。「九州の生氣 風雷を待み 万馬 齊しくおしだまり ついに哀れむべし。 我れ天公に勸む 重ねて抖擞して 一格に拘らず 人材を降せと。」

変法体制は百日維新で終わるが、康有為の変法運動は歴史の流れのなかで一定の進歩的な意味をもっている。「官督商弁企業」など知ると、もとより清朝政府には国有企業を民間主導の資本主義の起爆剤とする意図はなく、むしろ近代工業樹立の政策目標を実現する手段でとらえていたと思われる。

ここでの企業精神は慧遠の思想に通じる。「子夏曰く 君子信ぜられて而して後に其の民を勞す。未だ信ぜられざれば 則と以って己をやましむと為す。信ぜられて而して後に諫む。未だ信ぜられざれば 則ち以って己を誘ると為す。」

以上のように、郷鎮企業の発展や放権譲利の改革など、その真意を検討するとき、中国の企業観には、ふかく『仁学』と「和諧社会」の思想が根ざしていることを覚えておきたい。■

2010年
6月30日
水曜日

利光 強 教授（国際経済学）

「人間学」としての経済学 ——効用最大化の仮定について——

経済学とは、結局のところ「人間学」であると思います¹。人間を考えるとということ、つまり人間の意思決定や行動、そしてそうした人間から構成される社会の構造やその変化を捉えるということ、それが経済学であると思います。

ところで、いわゆる正統派の経済学では、個々の経済主体の効用や利益の最大化が市場メカニズムを通して、社会全体の効率や経済厚生を最大化することを厳密に証明しています。本日はその命題を成立させる「効用最大化の仮定」について考えてみようと思います。

人間にはできる限り自己の効用を高めようとする傾向があることは、ある程度事実かもしれません、同時に自らを振り返る能力があるとすれば、ある状況下で効用最大化を自己に許すことは規範的な価値判断に他ならないと考えます。しかし、こ

の「効用最大化の仮定」に対する批判は古くからあります。そもそも人間は必ずしも効用を最大化できるわけではなく、ある一定の満足水準しか達成できないとした、H. サイモンの「満足化原理」があります。また、A. センは効用という考え方に代わる「潜在能力アプローチ」により新たな福祉の視点を提示しました。しかしこれらは、結局のところ、要素や条件を変更しただけで、基本的な考え方は「効用最大化の仮定」と大きく変わらなかつたと言えます。

ところで、効用関数に社会的な評価や規範を導入する考え方があります。例えば、ハリウッドスターはアカデミー賞会場の赤絨毯の前に豪華なリムジンではなくプリウスで乗りつけることが、ちよつとしたステータスになっています。これは、社会から自分が地球環境のことを考えて

いるということを評価してもらいたいがためにそうした行動をしていると理解できます。つまり、自分は必ずしもプリウスに乗ることを好まなかつたとしても、社会からの評価が高まるならば、そうしたことをすることで自己の効用を高めると考えられます。さらに、入院しているある人の隣に自分よりも重態な患者が寝ているとき、自分の痛みを和らげるために数少ない看護師さん呼びつけるのではなく、隣の重態患者のためにその痛みを我慢することで、看護師さんの人的サービスの分配を配慮することもあります。

このように、人間の意思決定や行動は必ずしも自己の効用のみを最大化しようとする利己的な側面ばかりでなく、必ずしも利他的ということではありませんが、ある状況のもとでは、他人との関係性や社会的規範に規定されながら、意思を決定した

り、行動を選択したりするとも言えます。こうした観点は、注にも触れているように、最近の「行動経済学」や「神経経済学」という新たな研究分野のなかで、しだいに理論的・実証的に解明されつつあります。言い換えれば、新しい人間観によって、単純な「効用最大化の仮定」を超えた別の規範的仮定に基づく効用関数、あるいは個々の経済主体にとつての評価形成過程の可能性を探ることが重要になってくると思われます。

1 経済学はそもそも倫理学や哲学の一分野に過ぎませんでした。独立した学問分野として成立していった経緯については、経済学説史の授業で勉強してください。また、現在、「行動経済学（行動ゲーム理論）」、「実験経済学」さらには「神経経済学」といわれる分野の研究が進んでいく中で、経済学を改めて「人間学」として捉えなおし、新たな経済学を構築しようとする潮流が現れてきました。

2010年
7月5日
月曜日

私たちは、毎日あるいは刻々とさまざまな情報に否応もなくさらされている。しかもその情報は私たちへの「呼びかけ」として侵入してくるから、無碍に無視することができない。

私は日に何度か、朝起きたとき、勉強に疲れて一息入れるとき、大学から帰宅した時などにパソコンのメールを開く。緊急を要するものから、どうでも良いようなメールまで沢山くるが、電子メールの長所である機敏性は、返事の即応性を暗黙のうちに表示している。私も送り主がすぐの返事を期待しているだろうと想像してしまう。そのためゆっくりと考えて返事することよりも、即答することが礼儀と思うようになってしまった。また「ペーパーレス」をうたい文句にして、大学や学部からの正式の連絡や会議の案内などもほ

竹本 洋 教授（経済学史）

眠るじよ、眠られるじよ

とんどがメールになってしまった。それを見落とすと職務怠慢とみなされ、ゆくゆくは懲戒の対象になるかも知れない。学生諸君もパソコンを通じて授業登録をしたり、授業の資料などをえたりすることが多くなつたし、友人等の連絡であれば携帯電話は必須なっているだろう。私は携帯電話をもつてはいるが、常時身につけていないために、電話をもらつたことに後になってから気づくという失敗をおかす。

このようにパソコンや携帯電話にたえず注意を払っておかないと仕事でも私事においても支障をきたすようになってしまった。そのため私の生活はところ構わない頻度の多い呼びかけにさらされ、いつのまにかパソコンや携帯電話のもつ早いリズムに影響を受けている。始末の悪いことに、私自身もそのリズムや呼びか

けにできるだけ順応しなければ、と自分で自分をいつのまにか眠らせている。しかし私の体も心も奥深いところでそれに違和感を感じ、息の長いリズムを取り戻したい、無遠慮で暴力的な呼びかけを無視したい、と叫んでいる。みなさんのなかにも同じ思いの人がいるかもしれない。携帯電話やパソコンを完全に拒否することはできなくても、せめて生活のなかにこれらのテクノロジীরリズムとは違う自分のリズムを確保したい。そのために長い時間を要する読

書をすることも一案である。電子書籍の未来はまだ不明だが、手に伝わる本の重み、ページを開いたときのインクのかすかな匂い、ページの余白部分の余裕と落ち着き、そして美しい装丁を楽しみつつ、すぐには読み通せないような、たとえばダンテの『神曲』やゲーテの『ファウス

ト』をゆっくりと時間をかけて読もう。その他にも読むに値する本はたくさんあるが、それがニーチェであつても、ドストエフスキーであつても、もちろん『国富論』であつてもかまわない。そうした斜め読みを許さない本を探し当て、それを「自分のリズム」で読むことは、自分で自分を縛っているもの（自縄自縛）からわが身を解放することになる。そしてただむやみに「スピードが大車」と眠られないための防波堤にもなる。

2010年
7月7日
水曜日

土井教之 教授（産業組織論）

競争と教育

近年話題となっているのは、フィンランドの教育、韓国の激烈な受験競争、日本の教育の混乱などである。これらに関連して共通する問題は、「教育における競争」である。

近年、世界的企業のノキアでも有名なフィンランドの教育が、「高い学力と落ちこぼれが少ないこと」が話題になり、混雑・疲弊する日本の教育との対比で注目されている。そのとき、教育に競争がないことが強調される。

たまたま以前フィンランドに行き、ヘルシンキの空港から市内に行くリムジンバスの中で、前の席の2人が、職場（話から政府機関で働いているらしい）での競争が厳しいという会話をしていた。他のヨーロッパ諸国から来る人もい

るらしい。それに関連して興味をもったのは学校での競争です。当地で聞きますと、「子供たちが強く海外を意識して学習している」ことでした。兵庫県よりも小さい人口で、500万人強の小国が生きてゆくためには外国との競争に対応しなければなりません。ましては、この国はEUの加盟国であり、地域統合に組み込まれて

外国の大学への進学を考える生徒も多い。そこには、「強力な競争意識が働いているのではないか」、あるいは、「巷間言われるように、競争原理のない教育が行われているから高い教育パフォーマンスが実現されていると考えるのは少し違うのではないか」と考えました。むしろ、「競争環境下の教育」と捉えるべきであり、こうした競争意識が高い教育水準を支えている一因ではないだろうか。

ところで、経済学は、市場経済では、競争原理を基本として、強制原理（規制）、組織原理（企業内部）、協調原理（協業）を追加して機能することを説明している。自由で公正な競争は、経済資源の最適資源配分と政治的民主主義の経済的基盤（市場の仕組みは選挙投票の仕組みと対応し類似）を与えるメリットをもつ。他方で、もとより、競争のデメリット（市場の失敗）も発生するとは言うまでもない。こうしたことは経済学の基礎知識です。

一般に、日本では、競争のメリットは十分に理解されず、デメリットがより強く強調されているのではないか。特に教育ではこの傾向が強いのではなからうか。

①「教育の競争」

基本的には、子供たちには多様な能力・性格があり、それをそれぞれに開花させるのが教育です。教育における競争は、学生・生徒の努力を鼓舞し、また各自が得意とする技量を確認するのに有効であり、他方教師には教育についての創意工夫を促すであろう。産業組織論を応用して学区の競争環境と生徒の学力の関係を調べた英国の研究によれば、「競争の激しい学区ほど、学力は高い」という事実が確認されている。

公正で自由な競争は、子供たちの多様な能力を見つけ出すのに有用です。競争がなければ、生徒はどのようにして得意な分野を見つけられることができるのでしょうか。また、得意な分野を伸ばすインセンティブが生まれるのでしょうか。かつて、運動会で、例えば50m競走で順位をつけないことが話題になりました。この例に見られるように、教える側は、「教育の競争」を避ける傾向があります。

②「競争の教育」

教える側は、同時に「競争の教育」も回避する傾向があります。なぜなら、「競争は人間性を歪めるもの」と捉え、そしてまた教師間、生徒間、学校間、地域間

の格差を望ましくないとみなしていません。

外国では、皆さんと同じような内容、例えば希少性概念、を小学校から教えています。それは、自由社会の経済メカニズムを教えるだけでなく、「公正な競争が行われなくなると、社会はどのようなか」を学習し、政府の役割や企業の社会的責任などを通して、「人間性を養う」ことも大きな目的としています。

このように、競争と教育は重要な関係にある。フィンランドでも、競争原理が働いているからこそパフォーマンスが良いのではないか。もちろん、ついていけない子供も出てきますが、それをケアするシステムが整っているから、落ちこぼれがないのです。理解格差、学力格差が生まれるのもって直ちに競争を否定するのは間違いである。

経済学は、競争制限を求める者は社会的に正当化できない利益を得ることを示しています。同じように、教育で競争排除をうたう人も利益の享受を求めているはず。競争制限して一番利益を受けるのは誰だろうか。

2010年
10月18日
月曜日

大高博美 教授(言語論、プロソディー、普遍性)

日本語濁音考

本日は日本語における濁音化現象をテーマに取り上げます。これは、私の研究分野である音声学・音韻論に沿うものなのですが、チャペル講話でこんな堅い話を取り上げるのは、実はこれが初めてです。

さて、日本語には「連濁」と呼ばれる現象があります。二つの語が繋がって一つの複合語が作られる際に、後続語の最初の無声子音が有声化する現象のことです。例えば、「神」と「棚」(タナ)で「神棚」(カミタナ)ができますし、「紙」と「ハサミ」で「紙ハサミ」となります。日本語においてこの連濁は強力な音韻規則の一つで、例を探すのはいとも簡単です。「海」と「サル」で「海サル」、「雨」と「カエル」で「雨ガエル」というふうには、なぜこの連濁は起こるのでしょうか？実は、すでに上で答えて

いるのですが、繰り返すと、複合語を作るためです。複合語の生成というのには、二つ以上の語(形態素)が集まって新に別の意味をもつ語を作り出すという営みで、どの言語でも見られます。英語では、whiteとhouseでWhitehouse(大統領官邸)、greenとhouseでgreenhouse(温室)が出来あがります。文字で見れば、

2語から成る句と1語になった複合語では違いが一目瞭然ですが(後者では分かち書きされていない)、実は聞いただけでも分かりません。句では、どちらの語にも同レベルの強勢が置かれますが、複合語では最初の形態素(語)に第1強勢が置かれるからです。日本語でも同様です。ただし日本語では、強勢ではなく、ピッチ変化が利用されます。例えば先の「神棚」では、「神」は頭高の、そして「棚」は平板のアクセントパターン

ンをもっておりませんが(つまり本来ならピッチ変化が「ミ」で一旦下がって「ナ」でまた上がることになる)、複合語になると「アクセント核」語中でピッチが下がるところ)は一つになって「カミダナ」となります(つまりミとダの部分が高くなっています)。

一方、2語の連続が複合語生成目的ではなく単なる並列にある場合、この現象は起こりません。ですから、「やまかわ」と「やまがわ」では、構成素は同じであっても意味が異なるわけです。後者は、「山を流れる川」のことで、前者は単に「山と川」という意味です。

濁音化が起こらない理由が他にもあります。まずライマンの法則として知られている生成抑制規則です。例えば「海」(うみ)と「へび」では「うみへび」(cf. 海ガメ)のまま

ですし、「大」(おお)と「トンボ」で「おおトンボ」(cf. 大ガラス)のまま濁音が生じません。理由は、後続要素が始めから濁音をもっている連濁は生じないからです(「大ばしご」は例外)。そしてもう一つの理由は、三語以上から成る複合語の統語構造が右枝分かれになっている場合です。ですから「にせ+く+すり」とは言えても、「にせ+ざ+くら+まつり」とは言えないのです。後者では意味構造が右枝分かれ(つまり「にせ」+「ざ+くら+まつり」となり)を祝うお祭りなら「にせ+ざ+くら+まつり」(左枝分かれ構造)も可能です。実は、同じことが英語の複合語規則でも言えるのですが、それにしても何とも不思議ですね。

2010年
10月20日
水曜日

我が国の英語教育を考える

神崎高明 教授（英語学）

1960年代に駐日アメリカ大使を務めたエドウィン・O・ライシャワー氏は、日本ほど英語学習に努力をし、時間を使いながら効果を上げていない国は他にないであろうと言っている。日本人自身も英語は苦手だと思っている人が多い。国際的な英語の習熟度を測るテストとしてTOEFL、TOEICなどがあるが、このうちTOEICは日本と韓国での受験者が90%を占めており、国際比較が難しい。そこで今回はTOEFLを基に比較することにする。TOEFLはTest of English as a Foreign Languageの略で、米

国など英語圏の大学に入るための資格試験である。PBT（ペーパー形式）で最高677点、iBT（インターネット形式）で最高120点である。一般に、PBTで550点がある。大学の入学できる最低ラインであり、大学院入学では600点がある。600点は英検1級にほぼ近い数字と言われている。近年、我が国の主な企業では、英語力の指標として、TOEICを重視している。このテストは1979年に当時の経団連と通産省の肝いりで始められた試験であるので、企業が力を入れるのも当然である。筆者が親しくしているパナソニックの英語研修の関係者によれば、現在、社員全員がTOEICを受験することを義務付けられており、2000年度より主任昇格の条件として450点を設定されていたが、2007年度より、550点に引き上げられたそうである。英語ができないと、昇進ができない時代に日本もなったのである。英語を公用語とする大手企業も出てきた。

日本人のTOEFLの成績という点、残念ながらよくない。日本はアジア諸国の中で下から数えたほうが

早い。1999年度は、アジア25カ国中20位、世界171カ国中150位程度であり、この数字は、この10年間、大きな変化はない。2009年度のiBTのTOEFLの日本人の平均点は67点（paper-based TOEFLの520点程度）である。日本、韓国、中国のTOEFLの成績を比べてみると、1980年代までは、ほとんど変わらず、どの国も480点位であった。しかし、1990年以降は、日本は韓国、中国に大きく差を開けられている。韓国、中国はともに550点から560点（iBTで約80点）の高得点である。

なぜ、日本人の英語力が増進しないのだろうか。その原因は複合的であり、一つに絞ることはできない。原因の一つに、言語学的にみても英語が日本語の対極にある言語であるということがある。語順も全く異なる。この差は大きい。発音、アルファベットとひらかな、カタカナ、漢字表記の差もある。一方、ヨーロッパの言語と英語の共通性は歴史的に見ても驚くほど近接している。もう一つの原因は、中高大の英語教育の方法にある。コミュニケーション中心の英語教育が叫ばれて久しいが、掛け声だけ終わっているのではないだろうか。実際に、どれだけ運用能力を重視した英語教育が行われているかは疑わしい。さらに、英語教育の開始時期も問題がある。語学は12歳以降になると学習効率が極端に低下する。日本では、ちょうどその時期から、学習を始めている。これでは効果は期待できない。小学校の高学年、10歳位から運用能力に力点を置いた英語学習に切り替えるべき時期がきている。

2010年
10月27日
水曜日

原田哲史 教授（文化と社会の経済学）

カール・ブラント先生の死 (2010年10月19日)を悼む

基礎演習でデイベート大会のテーマ「テレビは子供に悪影響を与える」について説明していたとき、ふと留学中（ドイツ・フライブルク大学経済学部）の恩師カール・ブラント先生のことを話した。

「子供の頃、テレビ番組「コンバット」が好きだった。アメリカもので、第二次大戦末期フランスに入ったアメリカの部隊がドイツ軍を打ち破っていくドラマだった。その頃、戦争ごっこでその軍曹の役をやってドイツ兵を機関銃でやっつけるのが快感だった。けれど、20代後半の長いドイツ留学の中で、その意識が浅はかかったと反省した。ついていたブラント先生は戦争（ロシア戦線）で片目を失明されて、学者として苦勞されていた方で、にもかかわらず自分にとでも親切にしてくださったからだ。ナチス・ドイツは悪かったが、末端のドイツ兵は同じ人間として痛み・苦しみをもち、暖かいハートをもつ人間だったという当たり前のことを改めて実感したからだ」と。

1987年、夏が始まった頃、最終的に2000ページ余りになる博士論文を書いていて、書けた章は先生に見てもらい、手直ししてもらっていた。けれど、その頃、婚約者（現在の妻）には「結婚式までに博士論文を完成させて提出する」と言っていたのに、式が近づいても論文ははかどらなかつた。

そんなとき大きな失敗をした。ブラント先生が細かく手直ししてくださった書込み原稿およそ50ページ分（フィヒテの経済哲学の章）を、先生の研究室でいただいた後どこかに置き忘れて、なくしてしまった。家でカバンの中になかったので、来た道をたどってみたが、見つからない。この大きな部分がダメになると、博士論文を結婚式までに完成させることは無理だし、そもそもブラント先生は良い方の目も使いすぎで悪くされ、腎臓結石と高血圧で体調を崩されて、教授会も休まれたりしていた。そんな先生に直していただいたものをなくすのは申し訳ない。1週

間ほど守衛さんに尋ねたり、「見付けた人はお電話ください！」と張り紙をしたり、警察で落とし物を探ねたりして、探しに探した。けれど出てこない。

そこで、どれだけ怒られてもしょうがないと覚悟して、研究室に再度ブラント先生を訪ねて、心から謝った。すると先生は怒ることなく、「昔は助け合いの精神(Solidarity)があったから、落とし物は届けるものだったが、今はそれがなくて残念だ」と言われ、「直す前の原稿のコピーはありますね。もう一度やりましょう」と言われた。先生のこの優しさに、かえって「すまないことした！」と深く思った。怒られていたらふっ切れたかもしれない。けれど、病気がちの先生のそのご厚意に申し訳ない気持ちが収まらなかつた。その後、先生からフィヒテ章の再手直しを改めて受け取り、その結果、博士論文の執筆は進み、結婚式の1日前に完成した論文を提出し、花嫁への約束を果たすことができ

た。ブラント先生は多くのその約束を知っていたし、博士論文の完成を条件としてほしいの日本での就職の審査が行われていたこともご存知だったので、それらがクリアできるようにとご配慮くださったのだ。

留学中は、考える力はあるのに聞く・話す・読む・書くことでは同年代のドイツ人に比べてハンディキャップがある。ブラント先生は片目の失明という障害をもっておられたから、留学生のほくをよく理解してくださったのだろう。小学生の頃に「コンバット」でドイツ兵をやっつけることを楽しんでいた自分はアホだった、とつくづく思った。やられた元ドイツ兵にこれだけ親切にされたのだから。

先生は、その後も病気がちだったが奥さんの献身的な看護でもって長く一緒に生活してこられた。そして、なんとその授業の2日前の10月19日に87歳で永眠されていたことが、すぐ後で分かった。23日が葬儀とのこと。最後のご挨拶をしたと思う。■

2010年
11月10日
水曜日

藤井英次 教授（国際経済学）

関西学院の建学精神と経済学 ——奉仕と生産性について——

本書のモットーである「Mastery for service」の「service」とは「奉仕」、つまり社会（家族や隣人を含む地域社会から異国に暮らす人々を含む国際社会まで）に仕えることを意味します。つまり、本学ではどの学部においても社会への奉仕を念頭に学び、成長し、熟達するという精神が重んじられています。しかし、我が経済学部の「経済」という言葉から皆さんが先ず連想するのは「奉仕」よりも「景気」、或いは「就職」などに纏わる事柄ではないでしょうか。一見したところでは両者は相容れ難いもののような印象を受けるかもしれませんが。しかし、実は「Mastery for service」をモットーとする本学ほど経済学を学ぶにふさわしい場所はないと私は考えます。

奉仕とは社会的苦悩や困難の克服のために自らの能力をすすんで捧げ

ることを意味しますが、それは所謂社会奉仕活動や慈善活動に参加することだけを指すのではなく、もう少し広い概念と捉えることができるのではないのでしょうか。例えば、大学で自らの能力や人格を精一杯磨き、卒業後に企業でその能力を存分に活かして社会に優れた製品やサービスを送り出すことも、ある意味で社会に奉仕貢献することではないでしょうか。

経済学では一国の生活水準は基本的に在住者の生産性に依存すると考えます。そのような観点からは限られた資源、特に人的資源をいかに活用するかということが重要な意味を持つのです。仮に国民の多くが質の高い教育によって自らの能力を積極的に向上させ、各々の優位性を活かした職業に就いて生産活動に携われれば大きな付加価値が創出され、人々

は優れた製品や質の高いサービスに支えられた高水準の生活を享受することになります。逆に多くの人が教育機会を得ながらも十分に能力を磨こうとしなければ、彼らの生産性の低さは自身の所得水準の低さに直結するだけでなく、社会にとっても限られた人的資源の浪費という大きな費用をもたらします。

このように考えると、皆さんが大学教育を通じて自らの人格や能力をしっかりと磨き、それを存分に活かすことのできる職を得て社会で活躍することの経済学的な意味合いが見えてきます。それは単に個人が金銭報酬を得ることだけを意味するのではなく、付加価値の創出（具体的に優れた製品や利用者の立場に立った質の高いサービスの提供）を通じて人々の暮らしを充実させる、つまり自らのために働きつつも広い意味

での奉仕や社会への貢献を行うことをも意味するのではないのでしょうか。

将来の就職のために経済学を学ぶという動機は至極健全なものです。しかし、「Mastery for service」をモットーとする本学を経済学の学びの場として選ばれた皆さんはもう一段高い志を持たれてはいかがでしょうか。大学、家族や友人、そして社会が自分に何をしてくれるのかを問うのではなく、経済学を学ぶことで自分自身が何を身につけ、どう貢献するかを問うようになること。そして一人ひとりが社会のそれぞれの持ち場で自らの能力を最大限に発揮し、「奉仕のための練達」を体現すること。そのような人材を育成し、世に送り出す場として他ならぬ経済学部の営みがあるのだと私は考えます。

2010年
11月15日
月曜日

田 禾 助教（人文科学、中国語学） 言葉からみる中国女性の地位

中国語は中国文化の伝達手段であることから、中国語を詳細に分析することによって、中国の文化の一端が伺うことができる。例えば「男尊女卑」という四字熟語は女性の社会地位の低さを表している。しかし、この四字熟語は管見の限りでは、元曲で初めて使われている。ならば元曲になってこの考えが定着するようになったと言えよう。そもそも古代中国人の世界観では、宇宙が陰陽対照で構成されており「すべての時間の始まりは天から、すべての生命の始まりは地から」と考えた。そして女性が出産することから、「地」と同じであり、「陰」である。一方男性は女性の対照として、「天」であり、「陽」である。陰と陽、女性と男性、これらは古代中国人の宇宙観によれば、単に宇宙の構成の一部として存在し、特に尊卑の分け方で

はなかったようである。しかし残念なことに、後の時代では強力な封建社会・父権社会であるため、天地の自然な上下地位が利用され、「男尊女卑」の言葉が作られてしまった。では古代中国語から男尊女卑の具体例を見ていきたい。女扁の漢字には否定的な意味を表わす文字が多い。「奴隸」の「奴」「嫌気」の「嫌」、「妖怪」の「妖」など枚挙に暇がない。また漢許慎『説文解字』では「婦服なり」と、つまり「婦とは服従である」という記事が見える。女性が褒めるものもあるが、内容は女性の外観の美しさを描写するのみである。例えば李延年「羽林郎」には「娉婷（ほつてい、美しいさま）」という語が見られる。これは男性の審美観に合う、美しい物として描写されている言葉に過ぎない。宋代に下ると男尊女卑の考えが朱子学の影響でますます

す広がって、女性の地位も更に低くなった。「三綱五常」という言葉もその時代の象徴の一つと見られる。君臣・父子・夫婦の道である三綱は夫と妻の主従関係を明確に規定した。幸い中華人民共和国になって、農村・都市の区別無く男女平等の意識が広まった。それは毛沢東の「婦人は天の半分をささえている」というスローガンによって、多くの女性は社会を出て、積極的に自分の才能を発揮しながら社会へ貢献するようになった。目下、中国女性は各業界で活躍している。女性の学者・政治家も少なくない。しかしここで改めて言語学の観点から見ると面白い現象が生じている。トイレなどは必ず「男子トイレ」・「女子トイレ」のように平等に両方限定語の「男子・女子」を使うが、「部長（大臣）」という単

語の前に「女」という限定語がなければ、男性の政治家を指すことになる。実はこれは言語の「文化デフォルト」(cultural default)という規則により発生した現象である。つまり社会的な共通する概念として、言わなくてもその言葉しか浮かべないという言葉意味に対しての連想 (semantic coherence) である。わざわざ「女」という限定語を加えなければ、「部長（大臣）」のような社会地位の高さに位置する人はなかなか女性であることを連想できない現象は、女性の社会地位に関わる問題が現在に於いても伺えるのである。いつか男性も女性も同じ人間として自分の好きな生き方を自由に選択できる日が来たら、言葉もまた同様に変化を起こすことになるかもしれない。

2010年
11月17日
水曜日

山田 仁 准教授（イギリス文学）

自己分析への疑問

就職活動を始める際、多くの学生が自己分析や適職診断を受ける。ネットにおける関連サイトが、その需要の多さを示している。それらに共通する前提は、「自分」が固定的で不変の存在であるということである。自分が常に一貫した不変の存在であるという体験への揺るぎない信念が、自己分析や適職診断を支える。

そもそも「自分」は、不変で一貫した存在だろうか。二元論の危険を敢えて冒しながら、人間を肉体と精神に分けて考える。諸説があるものの、ヒトの肉体は約六十兆個の細胞から構成されている。新陳代謝によって、古い細胞が死に新たな細胞が生まれる。各器官によって差異はあるが、骨も含めて体内で大方の細胞が更新されるのに、約二年半を要すると言われている。従って、二年

半前のヒトの肉体はもはや今の肉体とは別物であり、二年半後の肉体は今とは全く別の物質になっている。確かに遺伝情報や肉体的特徴は引き継がれるが、肉体そのものは刻々と老化していて、不変の存在としての「自分」を保証するものとはならない。

精神は、生活環境などの外的要因や後天的な経験によって多大の影響を受け続ける。双子であっても性格や精神構造は異なる。家族、友人、職場、学校、コミュニティ、国家や民族など、外的因子が解きほぐせない状態で複雑にせめぎ合う磁場が人間の精神である。従って、どこまでが自分の領域で、どこからどこまでが外的因子からの影響の痕跡なのかを峻別することは不可能である。性格に関して言えば、催眠術を用いて潜在意識を覗き見ると、たいてい複

数の人格が現出するという。「性格」は英語で *personality* であり、*person* からの派生語である。*person* の語源はラテン語の *persona*（仮面）である。古代演劇の役者は、演じる劇に応じて仮面を付け替えた。古代人は、移ろいやすい変化の基軸で性格や個性を見ていたのである。

自分とは固定的でなければ不変でもなく、刻々と変化している動的なものとして理解する必要がある。本当の自分など存在しない。この前提で就職活動の話題に立ち返ろう。自己分析や適職診断は、今現在の束の間の「自分」についての分析であり診断である。自己分析や性格診断は、数年後の自分を診断する器用さを持ち合わせていない。だが大学生は卒業後数十年間就労し続ける。長い将来にわたって従事し続ける職業や仕事

を、今現在の自分という束の間の脆弱な基準に基づいて決断していいのだろうか。

自分にあつた仕事を探すべきではない。自分に仕事を適合させてはいけない。仕事は決してあなたに合わせるべきではない。ならば、あなたが仕事に合わせるべきである。あなたは、これからも刻々と変化してゆくからである。あなたと仕事のベスト・マッチングは、仕事にあなたを変えてもらうことによって図られるべきである。与えられた職業や仕事を自分のものとして受け容れる柔軟さ、忍耐強さ、そして謙虚さが求められる。そうすれば、仕事があなたを「あなた」へと育ててゆくであろう。

2010年
11月22日
月曜日

栗田匡相 助教（開発経済学）

君が世界を語るように、あなたが語れるように

「コミュニケーションを始める入り口には、二つあることになる。一つは、自分の目にするものと考ええることを客観化し、それを共通の合理的な言説によって言い表し、語られるべき内容の代表者ないし代弁者として、他者と同等かつ交代可能な人間として語る方法である。そしてコミュニケーションへのもう一つの入り口は、本質的なのは、きみ自身、きみが何かを語るのだという状況である」 アルフォンソ・リンギス

これまでの人生において飛行機に何度搭乗したのかを数えてみようとしたが、正確な回数はわからなかった。ただ少なくとも100回以上は乗っていることは間違いないだろう。飛行機は実はあまり好きな乗り物ではないのだが、大学生の頃から、バックパッカーと称して色々な

ところへ出向いてしまったもので、定員が数名のプロペラ機にも乗ったし、ミャンマー上空1万メートルを

飛行中に、けたたましいサイレンとともに「エンジンの故障で引き返す」という英語のアナウンスを聴くことになった。このときは自分の英語力の無さ故に引き返すまでの1時間程度の時間を冷静(?)に過ごせたものだ。最近の記憶に残るフライトといえば、去年(2010年)の11月にゼミ合宿で沖縄に着陸するときの雨(スコールと呼ぶべきか)はものすごいものだった。学生の前では平静を装っていたものの、心の中ではパイロットの運転技術に密かに拍手を送っていた。那覇の空港に降り立ち、スコールをより直接的に感じざるを得なくなった皆の顔には不思議なことに笑顔があった。笑うしかないほどの予想を超えたスコール

だったということなのだろう。自分にとつて初の沖縄はそんな天気の中で始まった。

明るる日のバスでの移動中、学生達が夜更かしの影響で爆睡をしている中、不思議なことに私一人だけが睡魔にもおそわれず、車窓を流れる景色に惹きつけられていた。何か際だって特徴的なものがあるというわけではないのだが、さりとて内地の景色とはまるで違う沖縄の自然を眺めていると、何か恍惚とした気分が沸き立つてくるから不思議だ。片道3時間、往復6時間という移動時間が全く苦にならないかった。

沖縄には、インドには、ガーナには、自分が知らない色があり、臭いがあり、湿度があり、湿気があった。どうやらそうした生の雑音(ノイズ)の振幅が大きい時に、こうした官能的ともよべる感覚が出現する

らしい。そう言われてみれば、バス移動の前日に食したヒージャー刺し(鹿肉)には、こうした異界へ迷い込むための呪術的な香りが漂っていた(おおげさか)。人間に限らず、植物や風景、更に言えば温度や湿度といった目に見えない空気感までも含めて、それら他者との「出会い」は、我々、人間に喜びをもたらす。そしてそうした「出会い」は、おおむね予測不能なものが多く、あるいは予測が不能な出会いほど、より官能的な喜びを我々にもたらすのかもしれない。なるほど、人間にとつて重要なことは世界が計り知れないこととで満ちていると言うことであり、それに出会うために出かけることが出来るということなのか。あのスコールをくぐり抜けて降り立った沖縄との出会いは、そんな想いを私に

与えてくれた。「感謝」である。■

2010年
11月24日
水曜日

韓 燕麗 助教（映画史）

無国籍映画

私は、中国本土以外の場所に居住する中国系移民によって製作された中国語映画について研究している。これらの映画は、映画の前に国名を冠するいかなるナショナル・シネマの枠組みにも収まらないもので、いわば無国籍映画である。たとえば一九三三年に、五歳の時に渡米した中国系移民のジョセフ・チョウという人が、サンフランシスコのチャイナタウンでGrandview Film Companyという映画会社を設立させた。以後一九四八年ごろまで、三十数本の中国語映画がアメリカの地で移民たちによって製作された。これらの〈中国映画〉とは呼ばれない（中国語映画）について、私が調べている。

今日、国籍を指標として映画を分類し批評することが、映画研究の主流であろう。ヨーロッパ近代が作り出した国民国家というフィクション

を映画に当てはめ、特にアジア映画に関する先行研究の中では、映画をその国の「国民文化」について「勉強する」ための良き教材とみなすものが多く見られる。

しかし、個々の国を単位とする映画研究のアプローチでは、もはや把握しきれない映画史の問題が存在している。トッキー映画が中国国内で大きな人気を博した三十年代初頭から、アメリカや東南アジアなど中国大陸以外の場所においても、中国系の移民たちが自らの母国語を使って異境の地で映画を作り始めていた。海外で製作されたこれらの中国語映画は、ただ単に中国系移民の郷愁を癒すエンターテイメントだけではなく、移民たちの映画はコミュニケーションのなかに存在していたさまざまなエスニック共同体を均質化させてしまうと同時に、観客を感情的に結

束させる力も持っていた。さらに、国際情勢や移住先の国の移民政策の変動により、中国系移民の帰属意識も絶えず変化していたのである。

映画のテクストを通じて、移民のアイデンティティが変容する過程を探ってきたが、その考察は、海外で暮らしている私自身にとっての内省の旅でもあった。中国で生まれ育ち、中国語による教育を受けた漢民族の中国人である私は、もしも日本で暮らす機会を得られずにと中国本土で生活を送っていたら、「中国文化・中国語・中国国籍」の三位一体の構造が一致した「中国人マジョリティ」として、その保護下のない中国系移民の現実を想像することすらできないまま、一生を終えることになっただろう。中国と日本のあいだを「越境」することによって、自らが「中国人」だと名乗る意味を

再考する機会が与えられたのである。

グローバル化が進行し、お金・情報国境を越えてますます流動化しつつあるなかで、私自身のように、複数の文化や社会の境界に生きなければならぬ人間はますます増えることであろう。移動の時代に生を受けたわれわれは、中央集権的な国民的アイデンティティへの同化に埋没されない「個」としての生き方を模索する機会をついに手に入れた。半世紀前における中国系移民のアイデンティティが構築されていったポリテクスは、「国民」としての自己同一性を超えたあり方を模索する現代のわれわれに、新たなアイデンティティを把握するための座標軸を提供してくれているのである。

2010年
11月29日
月曜日

加藤雅俊 助教（企業経済学）

イノベーションと人的資本

経済を活性化させる原動力として「イノベーション」が注目されている。イノベーションによる競争を通して、市場における新陳代謝が行われ、市場の効率性が高まる。企業にとつては、イノベーションを起こすことで生産効率を改善し、強い競争力の獲得につながる。イノベーションの創出において大きな役割を担うと言われているのがベンチャー企業である。

ベンチャー企業は、多くの場合は、小規模で資源や経験が乏しいため、資金調達などにおいて多くの困難に直面して、開業間もなく市場からの撤退を余儀なくされる運命にある。今日世界的に活躍するIT企業も例外ではなく、当初はベンチャー企業としてスタートしたが、多くの困難に打ち勝って今の成功がある。では、なぜそれらの企業は成功した

のか。ベンチャー企業の成否を分けたものは何か。その答えの一つは、イノベーションを実現できたかどうかであり、イノベーションを実現する上で重要な役割を果たすと考えられるのが「人的資本」である。

経済学において人的資本と云えば、マイケル・スペンスの「シグナリング理論」に代表されるように、経営者や労働者の教育水準の役割が注目されてきた。実際に、労働市場において、求職者個人の能力を正確に把握できないため、教育水準が重要なシグナルとなり、採用基準の重要な指標となることがよく知られている。ベンチャー企業にとつては、資源の補完やリスク回避の観点から、いかに外部組織と連携するかが重要な戦略となる。しかし、ベンチャー企業は、十分な資源や評判がないため、その取引相手や連携相手

にとつては、経営者の学歴や経験が企業の潜在的な能力を判断する際の重要なシグナルとなる。

大企業においては、何千あるいは何万人という労働者を抱えるため、経営者といえども、決定的な影響力を持つとは言えないが、小規模なベンチャー企業においては、経営者（創業者）の役割は絶大である。実際に、国内外の実証研究において、ベンチャー企業の経営者の人的資本は、外部連携を行っているかどうかの重要な決定要因となり、ビジネスの成否（生存、イノベーション、成長など）に大きくプラスの影響を与えるという結果が提示されている。

低迷する経済の活性化において大きな役割を担っているイノベーションの担い手はベンチャー企業であり、その成否を分けるのが人的資本である。今日のハイテク時代におい

ても、経済を動かしているのはヒトであるという事実は、見過ごされがちである。将来を担う経済学部の学生を指導する立場の人間として、この事実を強く再認識しておく必要があるかもしれない。

1 イノベーションは、プロダクト・イノベーション (demand-enhancing) とプロセス・イノベーション (cost-reducing) に大きく分けられるが、ここでは特に区別せず、様々な意味を含むものとしてイノベーションという言葉を用いる。

2010年
12月1日
水曜日

ウィリアム・モリスの理想の書物

森田 由利子 准教授（イギリス文学、ライフ・ライディング）

大学生の「本離れ」が指摘される。インターネットや日々進化する電子書籍によって、活字を読む手段が多様化している。書店最大の紀伊国屋書店も紙の本と電子書籍の両方を扱う電子書店を開設するという。今や、本を手に取り、紙のページをめくらずとも、情報を得たり、物語や長編小説を読むことができるのである。英語の授業を例に取ってみても、紙の辞書を手に行っている学生は皆無と言ってよい。ほとんどの学生が電子辞書や携帯を頼りに単語の意味を調べている。その光景は、手に馴染んだ紙の辞書を使って学生時代を過ごした私を時折寂しい気持ちにさせる。

「本」の歴史は古代まで遡る。そして時を経て中世以来、人間はずっと「本」を愛し続けてきたのである。そういつた脈々と受け継がれてきた

「書物愛」、「愛書家」の伝統の中にウィリアム・モリス（1834-1896）を位置付けることができ。ウィリアム・モリスは、今から150年ほど前、イギリスのヴィクトリア時代において多彩な創作活動を行った芸術家、社会主義活動家である。一般によく知られているのは、自然をモチーフにした彼の美しいテキスタイルデザインであろう。また、2009年に開かれた「アーツ&クラフツ展」のポスターに記された印象的なモリスの言葉——「役にたたないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない」を覚えていた人もいるかもしれない。そのモリスが生涯最後の仕事として力を注いだのが書物工芸であった。彼は、当時の機械印刷によって大量生産された醜い本を批判し、自らケルムスコット・プレスを設立して「理

想の書物」を製作した。書物蒐集をも再開した晩年のモリスは、文字通り「本」に囲まれて過ごしたのである。では、モリスにとつての理想の書物とはどのようなものであったのだろうか。彼の講演やエッセイなどから、モリスが中世の時代に作られた彩色写本や初期印刷本を「美しい」とみなしていたことがわかる。それらは、活字の美しさにおいて秀でており、機械ではなく、確かな技術に基づいた手仕事で作られたものである。また、彼が描いた散文ロマンスの作品群を読むと、モリスが理想とした書物のさらなる特質が見えてくる。まず、本は大切に受け継がれていく存在として描かれる。それ故、次世代への継承に耐えうるしつかりとした造りが望ましい。そして何より重要なのは、モリスの描く書物は、自然や大地と融和する存在だと

いうことである。物語の中で、本はその開いた頁に葉陰が落ちるような自然の中で読まれている。また、本の中に山や海といった自然そのものが内包されている場合もある。

ウィリアム・モリスがより良き書物を作るために、材料を吟味したことはよく知られている。手漉きの紙や木版画、ヴェラムの装幀など、ケルムスコット・プレスの本からは、木や土の香り、手触りが感じられるようである。手仕事による丹念な製作、受け継がれていく存在、自然や大地との融和——こう並べて考えてみると、モリスの「理想の書物」は、電子書籍の対極を成しているように思える。インターネットや電子書籍の利便性を活用しつつ、学生の皆さんには、是非「書物愛」の伝統について思いを致し、本を手にとってもらいたいと思う。

2010年
12月13日
月曜日

とある日の深夜。ゼミ生から一行だけのメールがきた。「人は何のために働くのでしょうか？」就活も終盤に差し掛かる頃だった。(まいつてるんやろか)あれこれ思案して返事を送った。「まず食べるため。自分が多少なりとも成長したと実感できる時、嬉しい。それから…」後で聞いたら、面接で訊かれてうまく答えられなかったので私に質問してみたらしい。(なーんや、紛らわしいな。)数カ月後、授業で卒業生をゲストに招いた。受講生からの質問。「お金を稼ぐ以外に働く意味はあるのか?」「仕事にやりがいはあるのか?」「哲学的?というか不安そうなのとせん若者に多少の不安はつきものだが、同時にわくわくした気持ちもあるはずだ。しかし、わくわくは感じられない。彼らは、社会人デビュー

西村 智 准教授 (労働経済学)

人は何のために働くのか ——資本主義社会における労働観と 企業の社会的責任——

を前に何かしら陰鬱な予感を抱いているのかもしれない、と思った。だから、あらためてゼミ生からもらった質問について考えてみようと思う。人は何のために働くのか。やりがいのある仕事とは何か。経済学では労働は不効用をもたらし、それはお金によって埋め合わされる。しかし、労働そのものが不効用だけでなく効用をもたらすことを私たちは経験則から知っている。自分の仕事に役に立っていると実感する時の喜び、自分の成長を感じる時の喜び。これらはまぎれもなく効用である。目にはみえない報酬ともいえる。では、今日の日本において労働の効用・不効用はどのような関係にあるのだろうか。仮に仕事による疲労(不効用)が一定とする(肉体労働が減り肉体的な疲労は減っている一方で感情労働が増えて精神的な疲労

が増している)。統計が示しているように報酬(効用)は減っている。そして、ここからが本題なのだが、労働そのものから得られる喜び(効用)も昔と比べて減っているのではないだろうか。資本投入量の増加により労働生産性が上がり、私たちの暮らしは豊かになった。その一方で、工場化により仕事は標準化され、顔の見えない消費者のためにラインに並ぶ労働者が増えた。サービス業では、ITのおかげで多くの仕事に標準化され、そういう仕事は正社員に代わって「安上がりの」非正社員が担うことも多くなった。標準化されるといことは、工夫の余地が少なくなるといこと、つまり、やりがい薄れる。また、非正社員は差別的な報酬を受け取っているだけでなく、企業から与えられる訓練も少ない(平均で正社員の半

分)。公共職業訓練が少ない日本では非正社員は報酬も成長の機会も少ない。正社員においては人員削減で労働負荷が高まる一方で報酬が下がっている。まとめると、労働の不効用はそのまま効用として効用は大きく下がっている。理論では不効用が効用よりも大きい場合は就業をしない。しかし、現実には違う。生活のために働かざるをえない。これが若い人たちが感じている陰鬱な労働観の正体だろうか。企業は従業員に対して労働に合わせた報酬、適度な休息、そして、働きがいのある仕事を与える社会的責任がある。すべての労働者は仕事を通じて喜びを感じ、成長する権利を持つ。コスト削減による競争だけではなく、雇用の質を高めて生産性を上げて競争力につなげる、そんな発想が日本企業に求められる。■

2010年
12月15日
水曜日

2010年度は、就職氷河期の再来と言われるほど、新規大卒者の就職戦線が悪化し、しかも、企業の採用活動の前倒しが問題になりました。それは、経済学部の秋学期の授業への悪影響となって現れました。それは、私の想像を超えるものでした。例年10月1日は、企業における4年生の採用内定式ですが、当日も、就職活動を継続中の4年生がゼミ生の4割近くいました。ところが、翌日に主要企業は3年生に対する企業セミナーを開始したのです。私の担当する2つの専門の講義に、履修登録者が750人又は千人いました。が、12月初旬時点の講義出席者は、いずれも百人を下回るほどに減少しました。3年生のゼミでも、企業セミナーを理由に欠席する学生が続出して困りました。

思い出してみると、今年度の学生の状況は、春学期から異例でした。

井口 泰 教授（労働経済学）

就職難を本当の意味で克服するために

公務員試験講座や公認会計士試験講座などに参加し、大学のゼミや授業に積極的に出席しないダブルスクール型学生がゼミのなかに複数いたからです。

これだけ、就職活動が厳しいのだから、学生は日本の政治、経済や社会の深刻な諸問題について強い問題意識を持つてもよいはずでした。しかし、12年前のアジア経済危機の時に違うのは、現在の学生が、ネット依存になり、本を読まず、文章も貧弱に思えるのです。

これまでも、天下国家を喜んで議論する学生はゼミ内の数名だけでした。しかし、飛び級で大学院に進学した学生、アメリカに留学し現地就職した学生、法・経でダブル・degreeを取り弁護士になった学生などを、毎年のように輩出してきました。

それに比べると最近では、世界に強

い関心を持ち、議論できる精神の持ち主が少ないのです。表面的で、思考に乏しく、狭いことにしか興味も知識もなく、ゼミや卒業論文を安易にしか考えない学生が増えました。自主的な参加意欲に支えられてきたゼミの高いパフォーマンスが、就職活動という口実の下に低下し、目の前で崩壊・挫折する局面に何度も遭遇しました。

本日の聖書の箇所は、旧約聖書と新約聖書からとりました。マラキ書は、旧約聖書の最後にある預言者の書です。その第3章に、神様の語りとして以下の通り書かれています。あなたたちは言っている。「神に仕えることはむなししい。……むしろ、我々は高慢な者を幸いと呼ぼう。彼らは悪事を行っても栄え、神を試みても罰を逃れているからだ。」これに対し、新約聖書のルカによる福音書第17章では、ファリサイ派の人々

が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えます。「神の国は見える形では来ない。……実に、神の国はあなたの方の間にあるのだ。」

現代の世界にも、依然として悪徳や悲惨は満ち満ちています。その世界で、自分だけ救われることだけに一生懸命の人には、世界の悲惨と悪徳は見えないのです。そこには、自己栄達への欲望しか残りません。

学生の皆さんが、早くから就職活動にばかり血眼になり大学で自らの精神を涵養することができなくなると、将来をかえって狭める結果を招くと危惧しています。神の国とは、神が支配する時間・空間のことです。世界の悲惨と悪徳から広く目を離さず、これと立ち向かう使命・情熱と大きな視野を持ちましょう。皆さんが、そのように生きる時間・空間にこそ、強い守りと導きがあると信じております。

2010年
12月20日
月曜日

上村敏之 教授 (財政学)

自己責任原則は貫徹できるか

競争に勝った者が報われる社会では、自己責任原則が基礎として横たわっている。受験戦争、就職活動、企業内の昇進など、外を歩けば自己責任原則の世界を垣間見ることができ。もちろん、自己責任原則を否定することはできない。努力が報われる仕組みは、社会が発展する基盤となっている。

しかしながら、自己責任原則を完全に貫くことは、意外に難しい。たとえば、子どもを過度な競争に巻き込むことには、少なからず問題がありそうである。特に乳幼児は、誰かの保護が不可欠である。子どもが努力しないからといって食事を与えないのは、倫理的に許されない。

また、自分自身の努力とは無関係に弱者となる者が、この社会には少なからずいることである。不運な事故によって働くことが困難になった

者や、生まれつき障がいをもつ者など、彼等を切っ捨て捨てる社会には違和感を覚えるだろう。

さらに、そもそもスタート時点での格差がある場合に、自己責任原則を貫くことがさらなる格差を生む。芥川龍之介の『河童』では、胎内の子どもの河童が、誕生するかどうかを誕生前に選択できる。しかし、人間は親を選べない。スタート時点での格差は、生涯の格差となる恐れもある。

以上の要因のために、自己責任原則を完全に貫けるほど、この社会は単純でもないし、フェアでもない。そのため社会を修正する必要がある。所得再分配機能だと思われる。課税によって集めた財源を、社会保障として再分配する政府を登場させることが、社会にとって必要不可欠となる。

とはいえ、すべての人が、政府による所得再分配を受け入れることは難しいだろう。すでに所得や富を得ている人は、課税がなされることを好ましく思わない。多数決原理を適用して、社会的な選択を行うならば、少数派が無視される社会が実現してゆく。そのような社会は、望ましい社会といえるのだろうか。

すべての人々が合意できる望ましい社会が存在するかどうか。この問題に対するひとつの回答が、ロールズの『正義論』によって提示されている。国民から何人かを選んて委員会をつくり、彼等の個人的な情報地位、所得、性別、年齢など)を剥奪し、そのメンバーが将来の社会の仕事を決定する。その結果、自分が将来の社会において弱者になるリスクを負うために、充実した社会保障をもつ社会を、すべての人々が一致

して合意できる。

この意味での社会正義を指向する社会は、富裕層に大きな課税を求めよう。とはいえ、あまりにも所得再分配が強すぎると、人々の労働意欲が削がれてしまう。社会の活力が低下してゆくかもしれない。ここで、再び自己責任原則が復活する。

自己責任原則なのか、社会正義の追求なのか、私たちの社会は常に揺れ動いている。そのなかで、現在の日本社会が向かっていっている方向は、まったく定まっていらないように思えてならない。少しでも望ましい社会が実現するように、望ましい社会とは何なのか、それを実現するにはどのような政策が必要なのか、建設的な議論が不可欠である。短絡的にならないためにも、社会経済と政治を歴史的な観点から見つめ直すことが重要である。

2010年
12月8日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／加藤和孝 教授（フランス文学） 初めてのチャペル講話

定年退職を控えてのチャペル講話といえ、昔を振り返って教育や研究について自らの思いを語る、というのが普通であろう。しかし、私は「初めてのチャペル講話」の印象が余りに強烈だったため、講話のタイトルとしてこれしか思いつかなかった。

もう40年近く前のことだ。経済学部では私のようにクリスマスチャンでない教員も、年に一回はチャペルで話すことになっている。これは前の宗教主事だった林忠良先生がお決めたことだ。もっとも、若い先生方が増えたためか、ここ数年は講話を免除してもらっていた。

さて、就任して間もない私に、林先生からお声がかかった。さあ、何を話せばいいのか。ほんとに弱った。就任当時、他にも色々困ることはあったが、賛美歌、聖書朗読に続

いて、こういう場所で講話をする。これには参った。まあ、何とかその場を取り繕ったつもりだが、さて何を話したのか、はつきり覚えていない。今でこそ、講話を要約した文章が「エコノフォーラム」に掲載されるようになったが、当時はそういうものもなかった（なくて幸い！）確かめようもない。

可能性としては二つ。一つは、留学中にテーマとして選んだジュール・ロマンという作家が唱えた主張を紹介するような話。もう一つは、スタンダールの『赤と黒』という小説についての話。多分、前者の話をしたのだろうと思うが、ここは一つ、後者の話をしたものとしよう。林先生、間違つたら済みません。初めての講話が如何にひどいものだったか、その時の情けない気持ち思い出しながら、それからおよそ

40年たった今、もう一度『赤と黒』についてお話しして、できればリベンジしたいと思う。振り返ちになるかもしれないが。

フランス文学科の大学院時代、京大を退官されて関学へ来られた生島遼一先生が、当時、桑原武夫先生とスタンダール全集の編集や翻訳をしておられた。講義でも、出版されたばかりの『赤と黒』を取り上げて、何か書くようにと課題を与えられた。

私が書いたのは、この小説の二つの場面に見られる、主人公ジュリアン・ソレルの心理と行動パターンの共通性に関してだった。一つ目は、レナール家の別荘でジュリアンが、レナール夫人の手を握る場面。二つ目は、ジュリアンがレナール夫人をピストルで撃つ場面だ。

あらずじを述べるスペースもない

ので、結論だけ言うと、これらの場面におけるジュリアンの行動は、いずれも自らに課した義務を果たすためであって、素直で自然な感情に導かれてのものではない。

初めてのチャペル講話が『赤と黒』についてだったとすれば、生島先生に提出したレポートを下敷きにしたはずだ。先生にほめられた記憶もあり、どうにか分かってもらえな話にはなるだろうと思っていたのだ。チャペルに何人ぐらの学生さんがいたか、まったく覚えていない。とにかく緊張しすぎた。その緊張が場の雰囲気をごわばらせた。私も逃げ出したかったが、学生さんたちも同じ思いだったに違いない。

その後、何度かこの小説を読んだ。スタンダールが幸福の追求を人生の目的としたことはよく知られている。ジュリアンもまた、桑原先生

のことは借りれば「幸福狩り」を人生の目的とした。しかし、時代はもはやフランス革命の人権宣言が高らかに謳った平等の時代ではない。反動的な復古王政のもとでは、いかに才能とエネルギーに恵まれていようと、製材所の息子が社会的地位を得て幸福を手にするのは至難の業だ。彼はナポレオンの崇拜者で、軍人として出世したいと思っていたのだが、ナポレオンは百日天下の後ワテルローの戦いに敗れて失脚する。自分に冷たく当たる親父や兄たち、俗物の市民階級を見返すため、出世するには僧侶の道しか残されてなかった。ある坊さんの弟子になってラテン語を猛勉強する。野心に燃えるジュリアンは絶えず自己を偽らねばならなかった。ナポレオンの崇拜者であることを隠し、聖職者として身を立てるために、信じてもない聖書を丸暗記する。

しかし彼は、出世のためには手段を選ばないといった厚顔無恥の野心家ではない。彼の幾つかの行動は、大胆不敵な性格のせいではない。彼が自らに課す英雄的な義務の遂行なのだ。生島先生も強調しておられるが、彼はきわめて繊細な感受性を持つてる。美しいものに感動し、俗悪なものに嫌悪感を抱く。プライド

が高く、侮辱に対しては敏感に反応する。本来は長所であるはずの感受性は、一方で、彼自身に向けられる鋭い自己観察の刃にもなる。果たすべき義務を前にして苦しい自問自答を繰り返す。「俺は臆病ではないか、卑怯ではないか、人に劣るのではないか」。最大の不幸は自分を軽蔑することである。彼にとつて幸福とは、立身出世よりはむしろ、自らに課した義務を果たすことにあるようだ。

しかしながら、何が本当の幸福か、困ったことに必ずしも本人がそれを一番よく知っているわけではない。ジュリアンの素顔は子供のよう屈託がなく、自由で素直で自然である。この愛すべき素顔に、野心や自尊心や義務感などという仮面をかぶせた罪は、ジュリアン一人が負うべきだろうか。彼が本当の幸福に目覚めるのは、その仮面をかぶる必要が永久になくなったときだ。死刑をまつ地下牢のなかで、毎日たずねてくる、彼の魂と響き合う魂を持ったレナール夫人と過ごすわずかな日々において、ジュリアンは本当の幸福を味わったと言えるだろう。自ら命を縮めるような真似はしないという、ジュリアンとの約束を守ったレナール夫人は、彼の死後三日目に子

供を抱きながら息絶える。
私も、リベンジなどと言ったが、そんな必要はなかったのだ。どんなに情けない自分でもあるがままだに受け入れてやらねば。この歳になつて、やつとわかるようになった。

2010年
12月22日
水曜日

村田 治 経済学部長

高い志を持ち世界で活躍してください

4年生の皆さんは、あと4ヶ月で大学を卒業し社会人となります。今日は、社会人になる4年生に向けて卒業にあたってのメッセージを贈りたいと思います。

わが国では、リーマン・ショック後の急激な円高のため、日本企業の海外展開が急激に進んでおります。そのため、海外に人材を求める動きが加速し、日本人労働者も海外で働くことが当たり前の時代になりつつあります。まさに、個人個人にグローバル化が求められるようになってきています。

他方、世界では、ヨーロッパを中心に教育改革が急速に進行しています。EU統合による労働力の流動化のために、高等教育の国境を越えた標準化が行われつつあります。例えば、各国共通の仕事の現場で求められるコンピテンシー（能力や技能）を抽出する作業が進められました。そして、このコンピテンシーを育成するためのカリキュラムが大学などの高等教育機関で設けられつつあります。このように、あらゆる場面で

グローバル化が進んできております。まさに、激動の時代に皆さんは社会に出て行くこととなります。このような時代だからこそ、社会に出てから勉強し続け、自己のコンピテンシーを高めていくことが必要となります。

とくに、コミュニケーション能力、多様性や他文化への理解など、世界で通用するようなコンピテンシーを養っていくことが求められています。このようなコンピテンシーを絶えずブラッシュアップしていくことが大前提ですが、その上で、もう一つ大事な姿勢についてお話ししたいと思います。

それは、「高い志（こころざし）」を持つて欲しいという事です。よく似た言葉に「野心」や「野望」がありますが、これらの言葉と「志」との類似点は「心に決めて目標を目指す」という意味にあると思います。しかしながら、「野心」や「野望」と「志」は違う点があります。「志」という字は、「さむらい（士）の心」と書きます。この「さむらいの心」

は、いわば武士道を意味します。皆さんは、新渡戸稲造をご存知でしょうか。一時、5千円札に肖像が書かれていた人物ですが、「武士道」の作者で世界的に知られています。新渡戸稲造は22歳のときアメリカに留学し、そのときにキリスト信者になっていきます。「武士道」は、彼が38歳のときに英語で書いたもので、原題は、*Bushido, The Soul of Japan*とあります。「武士道」は17章からなる書物ですが、新渡戸稲造はこれらの説明を行う際に、多くの聖書の言葉を引用しております。

武士道では高い倫理観が追及され、そのため、個人的利益よりも公の利益が求められます。つまり、個人のためではなく、天下、国家のためという考えが基本にあります。これは、アメリカの個人主義とは異なる考えです。個人主義の基本にはプロテスタンティズムの精神があり、個人個人の利益の追求が社会全体の利益になるといえる場合があります。さらに、この個人個人の利益の追求が効率的に行われる仕組み

として、市場原理が位置づけられています。本来、市場には秩序があり、それを実現させる仕組みとして、独占禁止法などが制定されているのですが、これは、個人個人の利益の追求は、場合によっては社会全体から見てもマイナスになりうるという考えが基本にあるからです。このように考えますと、武士道の考え方の重要性がわかっていただけたと思います。

もちろん、個人主義に基づく個人の利益の追求それ自体は決して悪いものではなく、発明や革新の原動力でもあります。重要なことは、個人の利益の追求がどこまで許されるのかという点に関して、一人ひとりが確固たる価値観や倫理観を持つことではないでしょうか。このような価値観や倫理観を持つことこそが「高い志」の前提に無ければならないと思います。さらに、価値観や倫理観に裏付けられた「高い志」は、まさに、*Mastery for Service*と相通するものがあります。

皆さんが、高い志をもって世界で活躍することを期待しております。

くわんがく経済学部アトラス

—経済学部から世界へ踏み出す第一歩—

経済学部に入學したばかりの希望に満ちた1年生も、
学部生活を満喫している在學生も、
この「アトラス」を手に、元気に世界に第一歩を刻んで下さい！



1. 国連学生ボランティアに挑戦！

2004年度からの注目の新プログラム。国連UNVプロジェクトとして開発途上国へ半期間（春学期または秋学期）赴き、情報通信技術・教育・環境・保健の向上に貢献する国際ボランティア活動。全学科目として開講されます。アジアでは唯一我が関学が初の協力校となりました。

（詳細は☉国際教育・協力センターへ）

2. 英語を極め、外国語を制す

英語を初め様々な外国語を、自主的にいくらでも学ぶことができます。外国語学校に行かなくても上ヶ原でこんなに学べます。

a. インテンシブ・プログラム（英語・フランス語・ドイツ語）

通常の外国語科目に代わる、ネイティブ教員による集中的な外国語学習コース。春学期に所定の手続きとTOEFL等の試験を済ませましょう。1年生の場合、秋学期から学習がスタート。

（詳細は☉言語教育研究センターへ）

b. ジョイント・プログラム（英語）

アメリカの大学との共同英語教育プログラム。少人数クラスでの集中レッスン、約1ヶ月の夏季アメリカ研修、ホームステイを経験。

（詳細は☉言語教育研究センターへ）

c. 英語中期留学、フランス語中期留学、その他の留学制度

・「英語中期留学」：3ヶ月半の英語研修留学で、原則として2年生が対象。

TOEFLの一定のスコアが必要。

- ・「フランス語中期留学」：リヨン第2大学でフランス語を特訓します。
 - ・他の「交換留学」：関学と協定を結ぶ海外43大学への1年間の留学。前記のリール第1大学への留学も含まれます。
 - ・「認定留学」：協定大学以外への留学等。
 - ・「外国語研修プログラム」：英語・中国語の現地研修。
 - ・「国際学生セミナー」：国連、インドネシア、英国で実施の、それぞれユニークなセミナー。
- (詳細は☞国際教育・協力センターへ)

d. 視聴覚資料の宝庫

大学図書館と言語教育研究センター（視聴覚室）にある数多くの映像資料、視聴覚資料を活用しながら外国語と国際感覚を磨いて下さい。独学で、着実かつマイ・ペースで学習していきましょう！
(詳細は☞大学図書館、☞言語教育研究センターへ)

3. 他学部の専門分野も、本格的に幅広く学ぶ

a. MDS（＝複数分野専攻制）

経済学部にいながら、他学部の専門領域も本格的に、体系的に学んでいく方法があります。それがMDS。他学部等が提供する副専攻プログラムを選択し、2～3年間で概ね40単位を修得して修了します。毎年、経済学部のゼミと同時に他学部のゼミに属して頑張っている先輩もいます。

b. 「ジョイント・ディグリー制度」

経済学部を3年間で早期卒業した上で、4年生として他学部（文・社・法・商）に編入学し、1年間で卒業できるようになりました。つまり4年間で、二つの学部を卒業できます。この制度、日本初のユニークな試みです。2004年度入学生から適用され、上記のMDSを利用し、もう一つの学部の履修も2年生から始めておくのがポイント（MDS応募は1年生秋学期に済ませる）。4年間でダブル学士号取得も可能です。
(詳細は☞学部事務室へ)

「学生生活」 を拡げる ために

1. 留学生と友だちになり、手助けする

毎年キャンパスに集う多くの留学生の友人になって、留学生の関学生生活を支えていくのが「日本語パートナー」です。定期的に、毎週一回程度、留学生の日本語学習の相手となったり、友人として留学生の生活を支えたりします。そうして国際感覚を磨きながら、アナタ自身が成長していくチャンスを手に入れて下さい。〈多文化共生〉の意味を自ら学びとる好機に。年に二回、春と秋に募集。「学部版国際パートナー」も新設。（詳細は①国際教育・協力センターと②学部事務室へ）

2. どんな奨学金があるのかな？

関学の中には、実に様々な奨学金があります。支給奨学金、貸与奨学金、その他の奨学金などなど。それぞれの申請条件・時期が異なりますので、チェックして十分活用を！（詳細は③学部事務室と④学生部へ）

3. 「これは困った！」という時に

家計を支える方に事故が生じたりして経済的に困窮したとき、「経済学部奨学金」を受けることができます。その他、日本学生支援機構等の奨学金にも応募することができます。もしこのような場合に陥ったら、まず学部事務室に相談を。

4. 「夏だ、山に行こう！」という時に

戸隠（長野）には通年で、立山（富山）には夏の間だけ利用できる山の家があります。

（詳細・予約手続きは⑤戸隠は学生課へ、⑥立山は総務課へ）

5. 免許・資格を身につける

a. どんな教員免許が取れるのか？

経済学部では社会、公民、地理歴史、英語といった科目の教員免許を取得できます。

（詳細は⑦学部事務室、⑧教職教育研究センターへ）

b. どんな資格が取れるのか？

学校図書館司書教諭、博物館学芸員、社会教育主事といった資格です。

（詳細は⑨教職教育研究センターへ）

大学院関係

1. 博士（経済学）学位授与について

次のとおり博士学位を授与した。

〔甲号 課程博士〕

加藤美穂子 甲経第37号

授与日： 2010年4月28日

論文名： 地方分権の政治・経済分析—地方財政における規律確保の条件—

丸山亜希子 甲経第38号

授与日： 2011年1月28日

論文名： Essays on learning and interaction in matching models

（訳：マッチングモデルにおける学習と相互作用に関する研究）

韓 美蘭（関西学院大学大学院研究員）甲経第39号

授与日： 2011年2月16日

論文名： 民族から見た中国労働市場—吉林省における就業行動と労働力移動を中心に—

〔乙号 論文博士〕 なし

2. 修士（経済学）学位授与について

次のとおり修士学位を授与した。

授与日：2011年3月16日

（正規生 8名）

尾形 泰基	固定資産税における適正な時価に関する考察
篠宮かほり	転職市場の実態と今後の課題について —労働者にとってより安心感のある労働市場整備に向けて—
高橋 陽子	銀行借入を含む企業の資本構成と銀行の戦略 ～証券化による債権流動化と収益率の内生化～
辻本 雅俊	平成22年度税制改正における連結納税制度の見直しについての考察 —Tax-adjusted Qを用いた設備投資行動に関する実証分析—
野口 紫	人口移動と地域間格差
林 武宜	日本における教育の格差の是正のために 教育の生産関数による推計
村岡 寛昭	繰り返しモラルハザードと非対称な専門的情報下での 耐久財生産独占企業に対する評判
柑本 一憲	半導体産業の牽引力

（エコノミスト・コース生 4名）

〔修士論文コース〕

地久里康和	法人事業税の外形標準課税に関する一考察
松本 考史	国際的サービス取引に対する消費課税のあり方について —電子商取引の扱いを中心に—
山下 有紀	土地に対する応益課税としての固定資産税 —大阪・埼玉・千葉データを用いた自治体間格差の検証—
福田 哲也	金融所得一体課税の考察 —二元的所得税による試算—

〔課題研究コース〕

なし

国際交流

2010年度の活動

活動内容	実績
交換留学 ／大学院受け入れ	フランス、リール第一大学より、秋学期2名の院生を受け入れた。
交換留学 ／学部受け入れ	春学期はフィンランド、ドイツ、アメリカより3名、秋学期はカナダ、韓国、オーストラリア、ベトナム、デンマーク、アメリカより6名の学生を受け入れた。
交換留学 ／学部派遣	春学期、2名の学生がアメリカ、中国より帰学した。2010～2011年度交換留学生として4名の学生をフィンランド、ノルウェー、アメリカ、カナダへ派遣している。
英語中期留学 海外インターンシップ	英語中期留学（マウントアリソン大学）に春学期3名、秋学期3名の学生が参加した。海外インターンシップとして、1名がクィーンズ大学で語学研修を行った後、海外でインターンシップを行った。
外国人留学生	中国、韓国、フィンランドからの留学生が学部生として69名、院生として中国から2名が在籍している。
海外客員教員 ／海外客員研究員	ポーランドより1名の客員教員を迎えた。

経済学部懸賞論文受賞者一覧

1985年から経済学部研究演習Ⅰ・Ⅱの在籍者を対象として懸賞論文（卒業論文の主要内容もしくは基礎となるもの）を募集している。共同執筆を認めており、選考委員会において審査し、原則として最優秀論文一篇を決定し、入賞論文執筆学生の氏名と論文名を掲載するとともに、賞状と副賞（図書カード）を贈呈することにしている。2009年度からの受賞者を下に掲載する。

年度	受賞者	論文名	入賞等	応募数
2009	川渕望美、 近藤祐未、 原田実恵、 入江一気、 岡田麻美、 井本慎也	超過負担分析による消費税増税政策の検討（共同執筆）	入賞	12 篇
	藤原寛智、 阿部敏之、 稲井良太、 阪上敬文、 岡崎璃瑠、 小山絵美	消費税引き上げの経済効果 －効率性と公平性の視点から－（共同執筆）	入賞	
	田中宣隆	民主化と経済成長の相互連関	佳作	
	高見 翼、 里田謙治、 森垣歩実、 八木優昌、 浜田加奈子、 津田浩平、 池田達哉	関西の交通インフラの一視角 －学生を対象とした関西国際空港活性化プロジェクト－ （共同執筆）	佳作	
	黒川博文	著作権保護戦略の行動経済学的分析 － iPod vs ウォークマン	入賞	
	西野美雪、 林まりな、 金田陸幸、 伊藤舞由子、 津田知明、 三宅 諒、 西口直也、 岩尾佳明	社会保障制度の再設計（共同執筆）	入賞	
2010	塩見謙人、 鈴木大樹、 橋塚智央、 吉村拓馬、 津田 薫、 磯 亮次、 西井彩佳	益税問題・損税問題から見る現行の消費税制度の問題点 （共同執筆）	入賞	12 篇

懸賞論文の選考について

今年度の懸賞論文には12編の応募があった。これは昨年度と並んで過去最多の応募数である。今年度は審査の結果、その中から別表にも示されている通り、以下の3編を入賞とした（佳作は該当無し）。

- ①黒川博文「著作権保護戦略の行動経済学的分析——iPod vs ウォークマン——」
- ②伊藤舞由子以下8名（共同執筆）「社会保障制度の再設計」
- ③磯亮次以下7名（共同執筆）「益税問題・損税問題から見る現行の消費税制度の問題点」

- ①黒川論文は、携帯デジタルオーディオ機器の著作権保護戦略について行動経済学的にモデル分析を行ったものである。「iPod対ウォークマン」という今日的な課題に経済学の新潮流である行動経済学を用いてチャレンジしたこと、またそこから得られた結論が興味深いものであること（例えば、著作権保護の程度に政府が介入するという次善の経済政策による市場均衡配分は政府が関与しない場合と同じであること）などが評価された。
- ②伊藤他の論文では、社会保障の2本の柱である現金給付と現物給付に焦点を当て、それぞれの給付が労働時間に与える影響を分析し、今後のわが国の生活保障についての政策を提言している。同論文は、先行研究の検討を十分踏まえた上で、現金給付と現物給付が労働供給に与える影響にまで踏み込んでモデル化して分析したことなどが高く評価された。
- ③磯他の論文では、消費税の増税が不可避であることを前提として、その場合にはいわゆる益税や損税といった不透明性が問題であるとして、益税額・損税額の大きさを試算している。同論文は、論点が明確であり、豊富な資料を用いて丹念に益税額・損税額を積上げ試算しており、論理の道筋も整理されていることなどが評価された。

以上の3編のほかに、今回は残念ながら入賞及び佳作にはならなかったが、以下の9編の論文が提出された（タイトルのみ挙げる）。④「遺伝子組み換え作物の普及要因分析」、⑤「逸失消費税額試算によるデジタル・コンテンツ課税の検討」、⑥「エコ・カー開発と環境意識変化の長期プロセス：1970～2010年」、⑦「ワシントン・コンセンサスの是非を問う ラテンアメリカを題材として」、⑧「日本における経済競争力 ～ICT投資による経済成長力の検証～」、⑨「第3セクター鉄道のこれから ～国鉄・JRからの転換路線について～」、⑩「阪神なんば線による影響」、⑪「環境税と地域格差」、⑫「人々を動かす魅力的な観光とは」。

今年度の入選は3編であったが、応募12編を通じて水準が高いというのが選考委員の一致した意見であった。また、内容だけでなく論文形式の面でもおおそ適切であったことも注目に値する。応募論文数が過去最多であったこととともに、これらの点は、2009年度に開催された学部創立75周年記念事業「Econofesta（エコノフェスタ）」の効果も大きかったのではないかとすることも選考委員一同の意見であった。

（懸賞論文選考委員会委員長 高林 喜久生）

龍象奨学金受賞者一覧

この奨学金は、楠井隆三名誉教授の寄付によって、若き研究者である大学院学生・大学院研究員の優れた研究の助成を目的としたものであり、『関西学院経済学研究』や『経済学論究』その他明確な査読つき学術誌に掲載された論文の中で優れた論文執筆者に対して奨学金を贈っている。

年度	受賞者	研究題目
1992	杉本直樹	内生的資本供給モデルにおける貿易理論
	寺本益英	日本における茶園経営の地域性とその推移：1896年～1940年
1993	宮川敏治	農地の住宅並み課税の問題点
1994	〈該当者なし〉	
1995	趙子輝	中国における金融政策の運営
	清滝ふみ	日本企業の理論的分析：企業内昇進モデル
1996	上村敏之	間接税負担と所得階級別消費行動
	西村 智	パートタイム労働者需要の2類型
1997	広末哲也	社会資本ストックの地域別生産効果の分析
1998	横山直子	わが国における所得税納税システムの問題点 ～徴税コストと徴税行政の公平性～
1999	本郷 亮	A.C. ピグーの財政論に関する一考察
	後藤達也	消費関数の時系列分析－DHSYモデルの再検討－
2000	樂 玉璽	青島の海運貿易 1897－1945
2001	伊藤敏雄	大正・昭和初期大阪市内工場における水運の利用
	加藤美穂子	財政赤字累積下でのBuchanan and Wagner 仮説再考 －Niskanenモデルによる公債錯覚仮説の検証－
2002	山下雅弘	進化ゲームにおける動学的均衡
	村田恵子	米国における教育政策と産学官連携－連邦政府・州政府の役割を中心に－
2003	森澤龍也	金融緩和政策が設備投資に与える影響－金融契約理論による理論的考察－
	瀬口浩一	社会資本を考慮した世代会計の作成
	楽 君傑	中国の沿海農村地域における男女別就業構造と就業選択の分析 －浙江省山県の場合－
2004	下山 朗	固定資産税の応益性－大阪府下データを用いた実証分析－
	西藤真一	イギリス鉄道改革と設備形成メカニズム
2005	林 智子	わが国の滞納の実態と税務行政
2006	入江啓彰	DEAによる消防サービスの効率性に関する実証分析
		－大阪府下データを用いて－
2007	横山寛和	厚生年金制度のストック分析
		～バランスシート・アプローチによる持続可能性の検証～
2008	〈該当者なし〉	
2009	韓 美蘭	大学新卒者の就業行動およびその規定要因に関する実証分析
2010	林 亮輔	集積の利益と地域経済
		－企業活動に関する最適空間構造のシミュレーション分析－ 企業誘致政策の地域経済へ与えた影響－三重県亀山市の事例から－



① 特集記事の企画には毎回頭を悩ませますが、とりわけ今年は悩みました。75周年も無事に終わり、毎年就職活動のためのハウツーでも芸がない…。結局、経済学部での学びが社会といかに関わっているかを考えるためのテーマにしました。特集のアイデアを頂き、学生の経済学に対する疑問を吸い上げて下さった編集委員の先生方、ありがとうございます。また編集作業においては資料準備室の伊藤さんと植田事務長、座談会の原稿化では事務室の田中さんにお世話になりました。本号を置き土産に、しばし全学の仕事に旅立ちます…。(QP)

Publisher

村田 治 (経済学部長)

Chief Editor

小林伸生

Editors

猪野弘明
田 禾
松枝法道
森田由利子
山田 仁

Managing Editor/Staff

植田幸利 (経済学部事務長)
田中佐幸
伊藤真由美

発行/関西学院大学経済学部

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL. 0798-54-6204

©2010 All rights reserved.

② 去年に続く編集委員でしたが、相変わらずあまり役に立っていません。特集記事を書きましたが、締め切りを延ばしてしまいごめんなさい×2。えらそうに編集後記書かせていただいてごめんなさい×3。こういうやつが出てくることを経済学で「ただ乗り問題」といいます(特集記事参照)。エコフォーラムに携わった、学生の方々をはじめ、すべての方々に感謝いたします。(イノ)

③ 関学の初年度に編集に参加するチャンスはいただき、とても光栄です。他の学部にも同じような雑誌があるかもしれませんが、この雑誌は学生と教員が分担して編集するものであり、その点は独自の試みで、非常に有意義だと思います。毎回この雑誌は学生の皆さんの努力によって刊行されてきましたが、今回も学生の皆さんの協力なしにはできなかったでしょう。基礎演習のアンケートでは、皆さんが真剣に素朴な質問を書いてくださり、私自身もとても刺激を受けました。コンピナーの小林先生をはじめとする委員会の皆さんに感謝致します!(DEN)

④ 今回、再び編集委員としてエコフォーラムの発刊に携わる機会に恵まれ、あらためて関学経済学部の人のつながりを深く実感することができました。その内容たるや、機関紙の枠を超えて非常に読み応えのあるものに仕上がっていると自負しております。編集長の卓越した企画力と明晰な判断力が、それに大きな役割を果たしていることは言うまでもありません。毎年、いろいろな高校へ模擬授業に出向くたびに、エコフォーラムの記事を通じて関学経済学部に興味を抱いたというコメントをもらいます。これからもこの素晴らしい伝統を、しっかりと継続していきましょう。(松)

⑤ 関西学院大学に勤務することになって一年近くが経ちました。あっという間でしたが、新しいことばかりで戸惑うことも多くありました。そんな時、『エコフォーラム 21』16号を手に取りました。記事の内容がおもしろいことはもちろん、私にとって『エコフォーラム 21』は、関学経済学部の活動の概要を知る助けとなりました。この17号に関しては、編集委員でありながら、企画・編集作業のお手伝いをほとんど何もできませんでした。コンピナーの小林先生をはじめ、

編集に携わられた皆様、お役に立てず申し訳ありません。(森田)

⑥ 眠りに就くための方法数多。ヒーリング音楽、哲学本、深夜放送、羊…だがこれらの方法が全く通用しない夜がある。負のスパイラルに陥りいよいよ目が冴えてくる。神経が研ぎ澄まされる。焦燥感が頂点に達する。このような時には満天の星のきらめきも騒々しい。現在の日本はさしずめ不眠症患者ではないだろうか。景気回復、雇用創出、財政再建、人口減少阻止…強迫観念だけが先行する。事態は変わらない。日本も思い切って眠ることを諦めてみてはどうか。そうすれば、いつしか活力を取り戻して目覚めるかもしれない。(山田)

⑦ 経済学部では今年度、新たな試みとして1・2年生を対象とした「キャリアセミナー」を開催した。企業から本学の若手OBを招聘して、学生に対して「学生時代に何が必要か?」を熱く語ってもらった。在学生がこれからの学生生活を有意義に送るためのターニング・ポイントとなってくれることを大いに期待する。また、この超就職水河期が今後どれ程の期間続くのかは判らないが、今回のセミナーを受講した学生が就職活動をする頃には、希望した企業に内定をもらって鼻高々に満面に笑みを浮かべている顔を数多く見たい。(yuki)

⑧ 今年度も学生と教員が協力し、エコフォーラム第17号を完成させることができました。特に学生ページを作成したエコゼミ委員会の皆さんは、S氏の厳しくも優しい指導のもと、執筆・編集を繰り返し、悪戦苦闘しながら立派な記事を完成させました。本当にお疲れ様でした。今号のテーマは「社会人基礎力」です。経済学部OBOGの座談会や学生の「素朴な疑問」を取り上げた特集記事など、役立つ情報が詰まっています。勉強や就職に不安を感じる学生が多いと思いますが、本誌が学生生活の一助となれば幸いです。(田)

⑨ 関学で働き始めてもうすぐ1年。関西に引越してきて2年弱。学校の様子にも関西弁にもようやく慣れてきた感じがします。何もわからない私が『エコフォーラム』の編集に携わって良いのか不安でしたが、皆様のご協力のおかげで、無事に終わりました。どうもありがとうございます。(ito)